

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報 29

平成25(2013)年度事業報告

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

平成27(2015)年3月

序 文

鹿児島大学キャンパスは、後期旧石器時代から現代まで長期にわたる多くの貴重な埋蔵文化財が包蔵されている遺跡地です。昭和 60（1985）年 6 月 1 日に設置された鹿児島大学埋蔵文化財調査室によってキャンパス内の発掘調査が行われており、その成果は、これまでに『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』vol.1～26、『鹿児島大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書』第 1～7 集として逐次報告されてきました。

平成 24 年（2012）年度 4 月 1 日、新たな施設名称「鹿児島大学埋蔵文化財調査センター」となった後も、『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報』vol.27・28、『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書』第 8～10 集を刊行し、従来通り発掘調査・試掘調査・立会調査や普及啓発活動を随時行っています。

今年度は、鹿児島大学埋蔵文化財調査センターの平成 25 年度事業報告として『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報』vol.29 を刊行することになりました。平成 25 年度は、発掘調査 3 件、試掘調査 1 件、立会調査 9 件のほか、遺物整理作業、出土遺物貸出やワークショップなどを実施しました。本書にはそれらの概要が掲載されています。

現在も、キャンパス内では多くの建物の建設や周辺整備などが行われ、それに先立ち文化財保護法に基づいた埋蔵文化財調査が行われています。学内施設整備が円滑に進むよう、またその調査報告書を早期に刊行することで調査成果を社会に還元できるよう、埋蔵文化財調査センターは全力を尽くす所存です。

キャンパス内から出土する貴重な大学の財産、県民・国民の財産としての埋蔵文化財の調査及び研究を行うための体制の実現について、重ねて全学的なご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成 27 年 3 月

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
鹿児島大学埋蔵文化財調査委員長

本田 道輝

例 言

1. 本書は、平成 25 年度 (2013) 年度に鹿児島大学埋蔵文化財調査センターが実施した事業の概要報告である。
2. 本書に掲載している発掘・試掘調査は、鹿児島大学埋蔵文化財調査センターが担当した。立会調査は、鹿児島市教育委員会が担当し、鹿児島大学埋蔵文化財調査センターが補助した。
3. 本書の作成にあたっては、埋蔵文化財調査センターが行った。担当者は以下の通りである。
遺物実測 寒川朋枝・福留直子
製図 寒川・福留・篠原美智子・濱田綾子・東友子
遺物写真撮影 寒川・吉本美咲
作表・執筆 寒川
編集 寒川・中村直子・新里貴之
4. 本書で報告している遺物の保管は、埋蔵文化財調査センターの管理のもと、学内の出土部局収蔵施設にて保管している。また、図版・写真などの資料は埋蔵文化財調査センターに保管している。

凡 例

1. 昭和 60 年 6 月 1 日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査室に便であるように、鹿児島大学構内座標を郡元団地と桜ヶ丘団地（旧宇宿団地）とに設定した。その設置基準は以下のとおりである。
 - （1）郡元団地では、日本測地系による国土座標第 2 座標系（ $X = -158,200$, $Y = -42,400$ ）を基点として一辺 50 m の方形地区割りを行った（Fig. 2 参照）。
 - （2）桜ヶ丘団地では、日本測地系による国土座標第 2 座標系（ $X = -161,600$, $Y = -44,400$ ）を基点として一辺 50 m の方形地区割りを行った（Fig. 3 参照）。
2. 本報告書におけるレベル高は、すべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
3. 本書で使用した遺構の表示記号は、以下の通りである。
SK：竪穴建物，SD：溝，P：ピット
4. 土層・遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用した。
5. 遺物に関しては観察表を作成した。その標記，表現については以下の通りである。
調整：調整名称の前の（ ）は，調整方向を表す。（－）；横位方向，（|）；縦位，（\）；左上がりの斜位，（／）；右上がりの斜位，とした。
6. 本文中の遺物番号は通し番号を付し，挿図・図版・遺物観察表と一致している。

ふりがな	かごしまだいがくまいぞうぶんかざいちょうさせんたーねんぼう 29							
書名	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報 29							
編著者	寒川朋枝・中村直子・新里貴之							
編集機関	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒 890-8580 鹿児島市郡元一丁目 21 番 24 号 TEL 099-285-7270 Fax 099-285-7271							
発行年月日	2015 年 3 月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 起因
		市町村	遺跡番号					
鹿児島大学構内 遺跡郡元団地	鹿児島市 郡元 1 丁目 20-15	4620	1-23-0	31. 572348°	130. 54575°	2013 年 7 月 8 日 ～ 2014 年 3 月 28 日	1062㎡	施設 整備 事業
鹿児島大学構内 遺跡桜ヶ丘団地	鹿児島市 桜ヶ丘 8 丁 目 35- 1	4620	1-23-0	31. 548192°	130. 52642°	2013 年 6 月 4 日 ～ 2014 年 3 月 18 日	1298㎡	施設 整備 事業
所収遺跡	主な時代		主な遺構		主な遺物			特記 事項
鹿児島大学構内 遺跡郡元団地	近世～近代		水田跡		陶磁器			発掘 試掘 調査 立会 調査
	中世～古墳時代		水田・畑跡 住居跡		土師器・須恵器 成川式土器片 弥生土器			
鹿児島大学構内 遺跡桜ヶ丘団地	近世～縄文時代				陶磁器 土器小片			立会 調査

目 次

I	平成 25（2013）年度の事業概要	1
II	発掘調査の概要	5
	2013-2 郡元団地 I- 9 区（電気・電子工学科棟改修工事に伴う発掘調査）	
	2013-3 郡元団地 I・J- 4・5 区（共通教育棟 1 号館改修工事に伴う発掘調査）	
III	試掘調査	14
	2013-4 郡元団地 F- 6 区（保健管理センター増築用地試掘調査）	
IV	立会調査	19
V	遺物整理	36
VI	刊行物	37
VII	遺物保管	37
VIII	普及・啓発活動	37
	鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会規則	39
	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター規則	40

I 平成 25（2013）年度の事業概要

平成 25（2013）年度は、発掘調査 3 件、試掘調査 1 件、立会調査 9 件を実施した（Tab.1）。遺物整理作業は 5 件、刊行物として、発掘調査報告書第 9・10 集、年報 28 を刊行した。そのほか、釘田第 8 地点出土木製品樹種同定サンプリング作業（年報 27 付編参照）、遺物保管作業 4 件、また普及啓発活動として附属中学校・鹿児島国際大学博物館実習施設への遺物貸出、夏休み親子遺物見学のほか、土器焼成実験ワークショップなどを実施した。発掘・試掘調査、立会調査の詳細、その他の事業に関しては、下に記す通りである。

Tab.1 平成 25（2013）年度事業一覧

事業	コード	調査区	工事名称	担当者	期間
発掘	2013-1	郡元 C-4	産業動物飼育実習棟新営工事に伴う発掘調査	中村・新里	2013 年 12 月 20 日～2014 年 4 月 30 日
発掘	2013-2	郡元 I-9	電気・電子工学科棟改修工事に伴う発掘調査	新里	2013 年 10 月 1 日～2013 年 10 月 25 日
発掘	2013-3	郡元 I・J-4・5	共通教育棟 1 号館改修工事に伴う発掘調査	寒川	2013 年 12 月 4 日～2014 年 1 月 16 日
試掘	2013-4	郡元 F-6	保健管理センター増築用地試掘調査	新里	2014 年 3 月 24 日～2014 年 3 月 28 日

事業	コード	調査区	工事名称	担当者		工事期間
				市教委	調査室	
立会	2013-A	桜ヶ丘 C・D-6・7	病棟新営工事・電気工事・機械設備工事	井口・上村	寒川・中村	2013 年 6 月 4 日、14 日 9 月 13 日
	2013-B	郡元 H・I-3 ～ 5	学習交流プラザ新営その他工事・電気機械設備工事	井口	新里・中村 寒川	2013 年 7 月 8・23 日 8 月 21 日
	2013-C	郡元 I-3 ～ 5	学習交流プラザ新営その他工事	上村	寒川	2013 年 8 月 21 日
	2013-D	郡元 L-9・10	ICP 発光分光分析装置と GC/MS による排水分析システム設置作業における土木工事	井口	中村	2013 年 12 月 13 日
	2013-E	郡元 P-7	第二講義棟改修工事	井口	寒川	2014 年 2 月 19 日
	2013-F	桜ヶ丘 M-9・10	敷地境界法面保護工事	井口	寒川	2014 年 3 月 4 日
	2013-G	郡元 Q-5・I-3	学習交流プラザ他外灯増設電気設備工事	有川・井口	寒川・新里	2014 年 3 月 11 日、19 日
	2013-H	郡元 P-7	電気電子工学科棟改修その他電気・機械設備工事	井口	寒川・新里	2014 年 4 月 22・30 日
	2013-I	郡元 K・L-5	大学構内ロードミラー設置工事	長野	寒川	2014 年 3 月 14 日
	2013-J	桜ヶ丘 H-5・6	附属図書館桜ヶ丘分館西側植栽地移設工事	井口	新里	2014 年 3 月 18 日

事業	コード	調査区	内容	事業	担当者
遺物整理	2009-1・2011-1	郡元	附属中学校発掘調査	実測・トレース	新里・寒川・濱田・東・赤尾・松崎・吉本
	2012-2	郡元	附属中学校プレハブ設置	実測・トレース	寒川・濱田・東・赤尾
	2012-A ～ J	郡元・桜ヶ丘	平成 24 年度立会調査	注記・実測・トレース	寒川・濱田・東・赤尾
	1976-1	郡元	釘田第 8 地点土器・木製品	注記・分類・実測	新里・寒川・濱田・東・赤尾

事業	内容	担当者	発行
刊行物	報告書 鹿児島大学埋蔵文化財調査報告書 第 9 集	新里・寒川・中村	2014 年 3 月
	報告書 鹿児島大学埋蔵文化財調査報告書 第 10 集	新里・鎌田浩平	2014 年 3 月
	年報 鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 28	寒川・中村・新里	2014 年 3 月

事業	内容	担当者	期間
遺物保管	農学部共通棟作業室引越（1 階→3 階）	中村・新里・寒川	2013 年 8 月 7 ～ 9 日
	教育学部遺物保管場所引越（2 号棟 4 階→事務棟屋上）	中村・新里・寒川	2013 年 10 月 1 日
	遺物保管場所確認作業（16 ケ所）	中村・新里・寒川	2013 年 10 月 17 日
	木製品保管場所引越（廃液処理室→食堂裏プレハブ）	中村・新里・寒川	2013 年 11 月 19 日

事業	内容	担当者	期間
普及啓発活動	附属中学校への遺物貸出（授業における使用）	中村・新里・寒川	2013 年 5 月 1 ～ 29 日
	鹿児島国際大学博物館実習施設主催特別展示への遺物貸出	中村・寒川・新里	2013 年 5 月 2 日～7 月 26 日
	樹種同定のためのサンプリング作業（森林総合研究所：能城修一先生）	中村・新里・寒川	2013 年 5 月 27 ～ 31 日
	夏休み親子遺物見学（桜ヶ丘団地出土遺物）	中村・寒川・新里	2013 年 8 月
	遺物実査（鹿児島県立埋蔵文化財センター職員）	中村・寒川・新里	2013 年 12 月 13 日
	土器焼成実験ワークショップ	中村・寒川・新里	2014 年 3 月 21 日



Fig.1 鹿児島大学構内遺跡の位置 (S=1/50000)

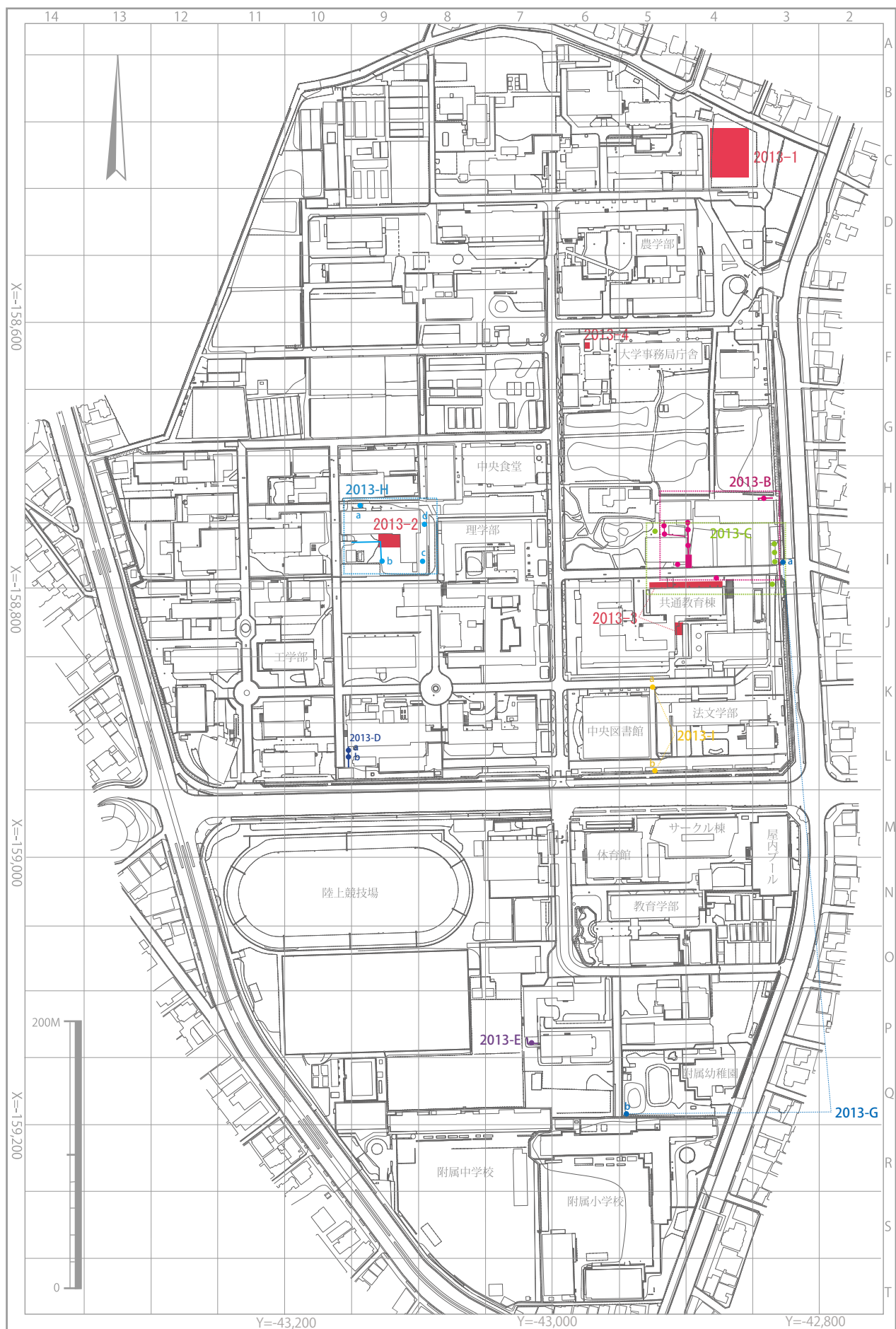


Fig. 2 郡元団地構内図 (S=1/4000)



Fig. 3 桜ヶ丘団地構内図 (S=1/4000)

Ⅱ 発掘調査の概要

平成 25(2013) 年度に行われた 2013-2, 2013-3, 2013-4 の発掘調査概要について述べる。2013-2, 2013-3 は鹿児島県教育委員会に提出した概要報告をもとに一部加筆修正を行ったものである。2013-1 については年度をまたいでの調査となったため、来年度刊行予定の年報 30 にて報告を行う。

2013-2 郡元団地 I-9 区（電気電子工学科棟改修その他工事）発掘調査

1. 調査にいたる経緯

鹿児島大学では、郡元団地の工学部電気電子工学科棟において校舎増築・改修工事が予定された。同地点の北側には、古代～近世の水田跡が確認され（学術情報基盤センター）、東側には弥生時代～古墳時代の河川跡（釘田第 8 地点）、南側には古墳時代の集落跡（理学部 3 号館増築地、理学部 1 号館中庭）が確認されている。そのため、埋蔵文化財調査センターにおいても、河川跡、水田跡、集落跡の重なる地点として注意している。このことから、今回の改修工事に先立ち、埋蔵文化財の試掘調査を行なう必要が生じた。そこで、平成 23 年 8 月 21 日、調査地点において大学埋蔵文化財調査センター、施設部、国際文化財株式会社と協議しながら、調査地点を確認した。

2. 調査体制

所在地 鹿児島市郡元 1-21-40

調査起因 電気電子工学科棟改修その他工事

発掘主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長 教授 新田栄治

発掘指導員 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 助教 新里貴之

管理技師 国際文化財株式会社 浦壁 晃

調査員 国際文化財株式会社 長尾 聡子

作業員 鹿倉征治・加治屋幸雄・川俣友秀・桐木平雅代・柴田恵子・下田まき子・高山重光
本田史比古・水迫久夫・安永政一・行野良子（五十音順）

発掘期間 平成 23 年 10 月 1 日～平成 23 年 10 月 25 日

調査面積 約 55m²

遺跡の現状 校舎隣接地帯

3. 調査経過

今回の調査地点は 2 箇所、工学部電気電子工学科棟に南接する。西側小トレンチを 1 トレンチ（3.6m²）、東側を 2 トレンチ（51.5m²）として呼称した（Fig. 4）。

1 トレンチは、3 × 1.2m のトレンチであるが、深さ 40 ～ 60cm で南北壁面側から配管が検出され、バケットが入らなくなり、重機での表土除去は断念した。その下位を人力で掘削していたところ、地表下 1.1m で水が湧き出し調査不可能となったので、写真撮影、測量を行い、1 トレンチを埋め戻して調査を終了した。これは後に、水道管の漏水によるものと判明した。

2 トレンチは 3.5 × 15m 弱のトレンチであるが、調査区内は 23 本の配管が走っており、重機による表土掘削はほぼ不可能となった。そのため、表土層から人力掘削を余儀なくされた。工事深度の関係上、調査深度は 1.5m までとされており、調査の結果、当初の予想通り、河川跡のなかを掘削したことになる。遺構などは確認されなかった。3・4 層下部で古墳時代のものと思われる土器片数点が出土した。近世以降の遺物は 2・3 層および攪乱層より一定量出土した。各層で写真撮影、測量を行い、調査を終了した。

4. 基本層位

調査トレンチは、校舎建築や配管・マンホールなどの設置など、後世の大規模な攪乱によって表土から包含層にかけての土層が確認できる場所が限定されていた。2 トレンチでは南壁と西壁の一部が該当箇所である。1 トレンチでは漏水による冠水のため、土層が調査深度まで確認できなかった。

基本土層として、大別して4枚の層が確認された (Fig. 5)。1層の攪乱層、2層 (水田層の可能性あり)、3・4層の河川埋土の砂層である。2層では近世の遺物が、3・4層では摩滅した古墳時代の土器が出土した。

1層：鹿児島大学時代の造成土層、それ以前と考えられる水田層もブロック状に混じる 遺物数が多い

2層：2層に細分される 遺物数は少ない (近世の水田層か)

a層：黄褐色 10YR5/6 シルト質細砂 しまり悪い

b層：灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト ややしまり悪い 調査区の南壁中央部のみでみられる

3層：灰白色 10YR7/1 細砂ベースに、極暗褐色 7.5YR2/3 マンガンが斑状に入り遺物数は少ない

4層：にぶい黄褐色 10YR4/3 粗砂ベースに、黒褐色 10YR2/3 礫、0.5～2cm 大のパミスが多量に含まれる 遺物が最も多く、その大半が摩滅している

2 トレンチは、掘削深度 1.5m で河川埋土層であったが、西側で4層が検出され、東側で3層が検出されている。東方面の河口付近にむかって緩やかに傾斜するものと考えられる。

5. 遺物

遺物は、小コンテナ (60 × 40 × 8cm) 1箱弱の出土量であった。

1・2層出土遺物は薩摩焼の灯火具や播鉢など、肥前系の皿などが確認される。3・4層では陶磁器類がみられなくなり、摩滅した土器がほとんどである。器形が分かるものでは古墳時代成川式の甕、壺、鉢類が確認される。4層より1点黒曜石 (三船産に類似) が出土している。

6. まとめ

本調査地点は、3・4層に弥生時代～古墳時代の河川埋土が良好に残存している。調査深度までは遺物も少なかったものの、工事深度によっては釘田第8地点のように、木杭や木製品も出土する可能性がある。今後も工事に際しては、慎重な対応が必要であろう。

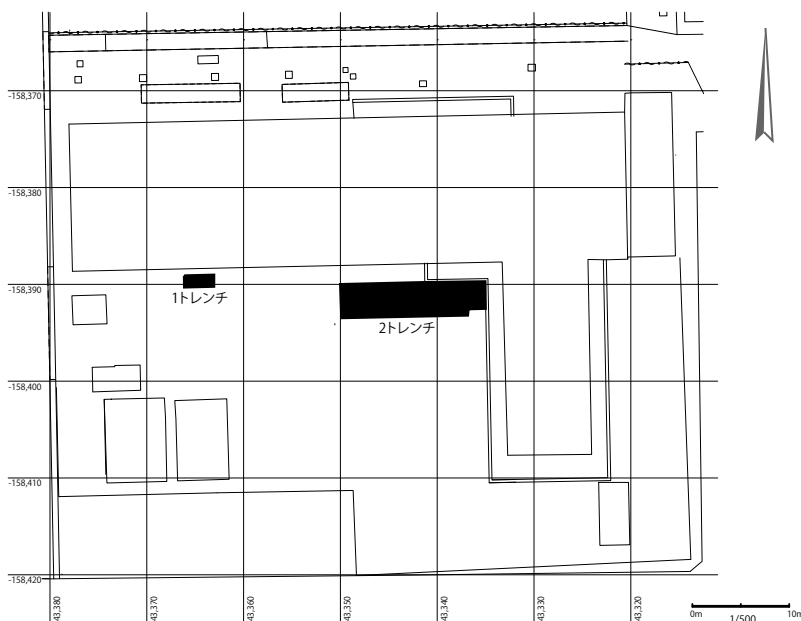


Fig. 4
2013-2 調査トレンチ配置図
(座標は世界測地系による)

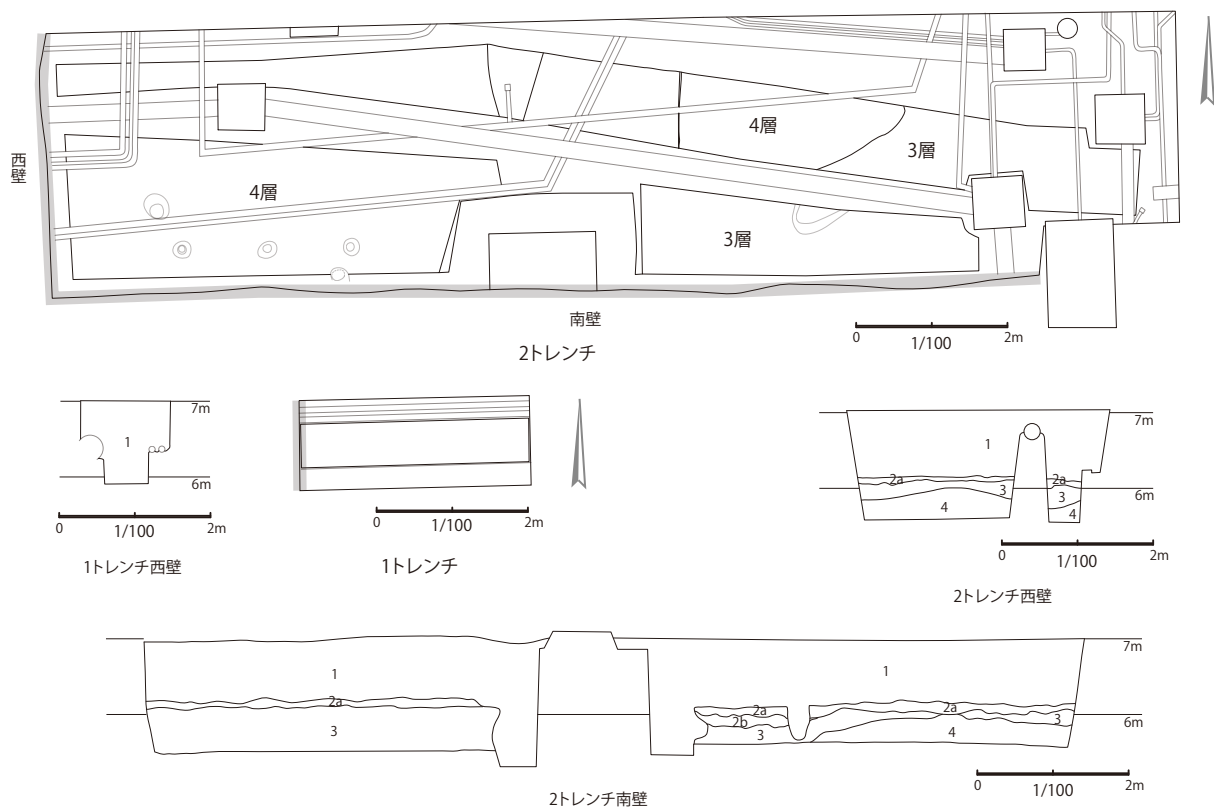
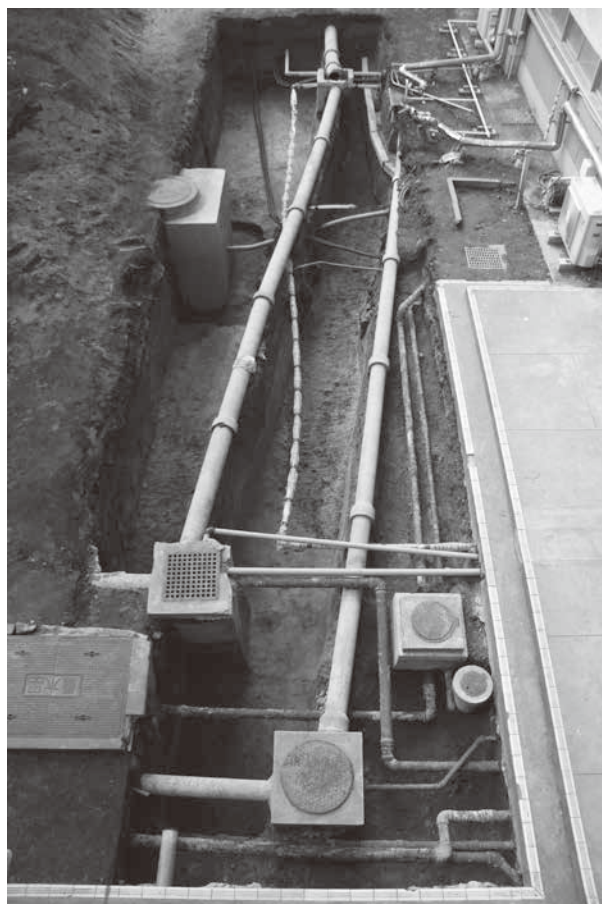


Fig. 5 2013-2 トレンチ土層



2トレンチ全景（東より）

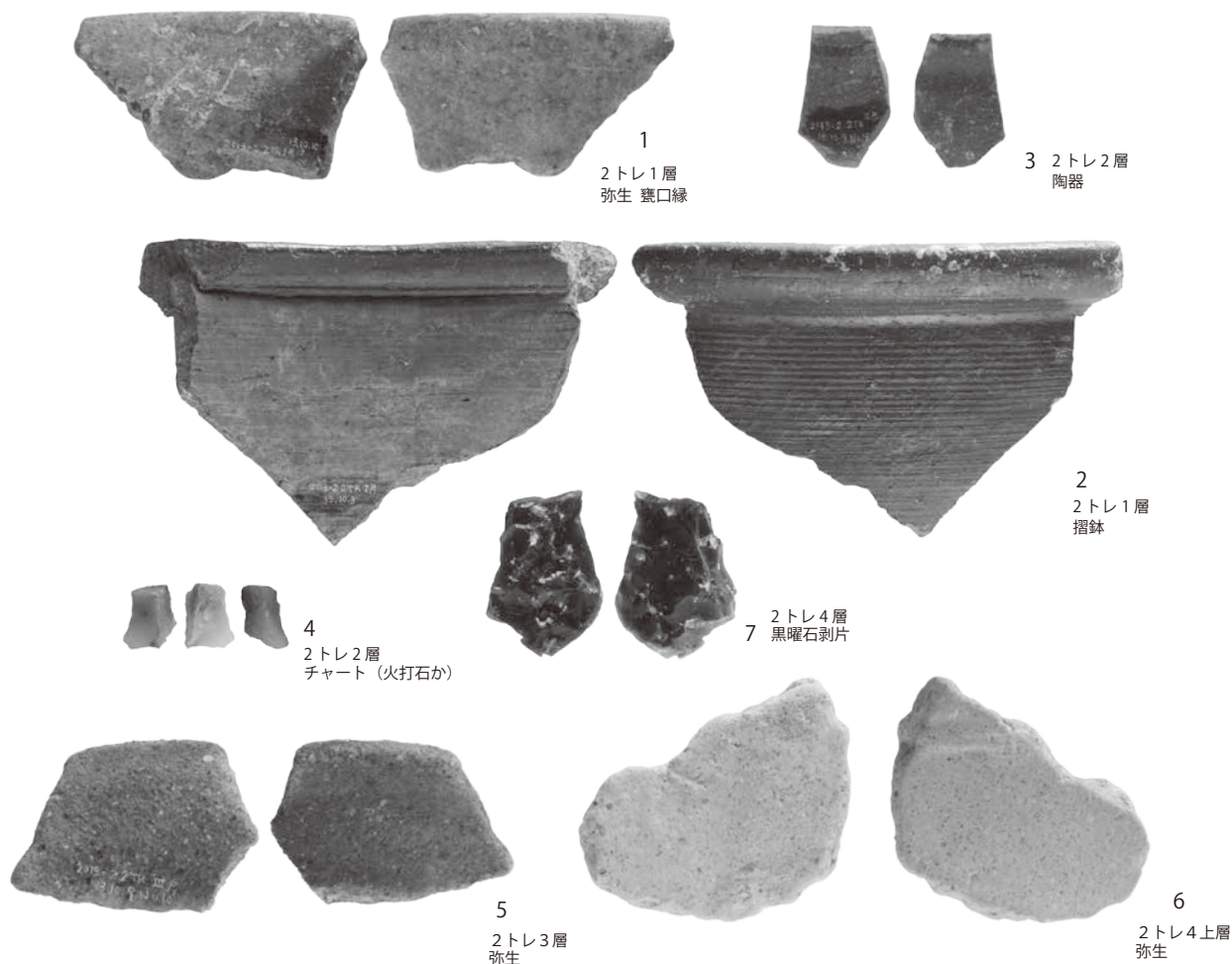


2トレンチ南壁（西側）



2トレンチ南壁（東壁）

PL. 1 2013-2 掘削状況・土層



PL. 2 2013-2 出土遺物

2013-3 郡元団地 I・J- 4・5 区（共通教育棟 1 号館改修その他工事）発掘調査

1. 調査に至る経緯

鹿児島大学では、郡元団地内において共通教育棟 1 号館の改修工事が予定された。工事地点は、鹿児島大学構内遺跡郡元団地中央部東側に位置し、過去の周辺の調査では縄文時代中期～近世にいたる複数の包含層が確認されている。工事地点周辺には釘田第一地点など古墳時代の住居跡が密集しており（鹿児島大学埋蔵文化財調査室調査報告書第 6 集（2011））、本工事地点も当該期の集落やそれ以降の時期の水田層が分布するエリアであることが推定された。

今回の工事は、北側増築部分（北区）と南側階段設置部分（南区）に分けられ、北区は便宜的に西から 1～3 区の調査区を設定した。本地点では、周辺の調査より地表下 60cm 前後で古墳時代遺物包含層上面に達すると予想され、地表下 90～110cm で住居跡等遺構検出面に達すると予想された。今回の工事では、北区は増築部分を地表下 90cm まで、南区は地表下 80cm まで掘り下げる予定であり、各地点とも予定掘削深度までの調査を行うこととし、掘削深度付近にて遺物・遺構が集中する地点については検出・記録・取り上げ作業を行って終了とすることとした。

2. 調査体制・期間・規模

所在地 鹿児島市郡元 1 丁目 21-24

調査起因 共通教育棟 1 号館改修その他工事

調 査 担 当 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 特任助教 寒川朋枝

調 査 員 国際文化財株式会社 長尾聡子・波多野芳郎

管 理 技 士 国際文化財株式会社 木村満

作 業 員 鹿倉征治・加治屋幸雄・上塩入久代・川越まゆみ・川畠 勲・川俣友秀・北村浩士・桐木平雅代・
蔵本公一郎・芝田恵子・下田まき子・高山重光・本田史比古・松下郁美・水迫久夫・安永政一・
行野良子（五十音順）

発 掘 期 間 平成 25 年 12 月 4 日～平成 26 年 1 月 16 日

調 査 面 積 約 150m²

3. 調査の経過

(1) 北区

平成 25 年 12 月 4～26 日／ 表土剥ぎ，配管除去，人力清掃

平成 26 年 1 月 6～16 日／包含層掘削（6～9 日：3 層掘削，10～14 日：4 層掘削，
15・16 日：5 層上面遺物出土，遺物取り上げ・コンター測量）

(2) 南区

平成 25 年 12 月 6～11 日／ 表土剥ぎ，人力清掃

平成 25 年 12 月 12 日～1 月 9 日／包含層掘削（12 月 12～13 日：3 層掘削，12 月 14～20 日：
4 層掘削，12 月 24 日～1 月 9 日：5 層上面遺物出土，遺物取り上げ・コンター測量）

北区は 12 月 4 日より，南区は 12 月 6 日より機械掘削による表土剥ぎを行った。北区は埋設管等で主に南側は大きく攪乱を受けていたが，北側半分は 2・3 層から下層は残存していた。配管や柵の撤去や攪乱人力掘削等ののち，1 月 6 日より包含層の掘削を行った。調査区は便宜的に 15 m 幅で 3 区分し，西から北 1 区，北 2 区，北 3 区とした。今回の調査は，工事掘削深度である 90cm までの調査予定であったが，調査区内では地形的に西側に向かって高くなる傾斜が認められた。そのため，調査区東側（北 2・3 区）はほぼ 4b 層上面まで掘り下げたところで地表下 90cm に達し調査を終了したが，西側（北 1 区）については 80cm でほぼ 5 層包含層に達し，5 層上面に土器小片が多数出土した。そのため，北 1 区については出土した遺物を取り上げて，5 層上半部で調査を終了した

南区は 12 月 12 日より包含層掘削を行った。調査区中央部南北方向に既設配管が埋設されており，現在使用中とのことで残して包含層掘削を行った。調査区周囲が攪乱を受けていたため，中央の既設配管東側に土層観察用にベルトを残し，各層上面にて遺構の検出，測量，記録を行いながら掘り下げた。また，4a・4b・5 層においてコンター測量を行った。南区については 90cm の調査深度予定であったが，レベルとしてはほぼ 5 層上面に該当し，北区同様に遺物が大量に出土したため遺物の取り上げを行って調査終了とした。北区・南区ともに 5 層下方は古墳時代の住居跡などが検出される層に該当するが，土器小片を取り上げ精査した時点では明瞭なプランを平面的に確認することは困難であった。

4. 基本層位

本調査区の基本層位は，2～4 層は近世以前の水田・畠跡に該当し，5 層上面において成川式を主体とする土器溜まりが検出された。この土器溜まりの中心部は 1999-1 総合研究棟建設に伴う発掘調査地点の中央部で検出されたものであると考えられ，本調査地点で出土した土器溜まりはその周縁部と思われる，土器小片や礫・軽石類が敷き詰められたかのように広がる。以下に基本層序を示す。

1 層：表土・攪乱

2a 層：灰黄褐色 10YR5/2・4/2 シルト層（部分的にブロック状に 2b 層含む）

2b層：にぶい黄橙色 10YR6/3 シルト層 白色小パミス混、硬くしまる (2層の主体となる層)

2c層：にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト層

3層：黄橙色 10YR6/8 シルト層 白色小パミス・細砂混、硬くしまる (中世該当層か)

4a層：灰褐色 7.5YR5/2 砂質シルト層 白色小パミス混、褐色 7.5YR4/4 マンガン浸透

4b層：にぶい褐色 7.5YR6/3 砂質シルト層 褐色 7.5YR4/3 マンガン浸透 (水田床土か)

5a層：灰黄褐色 10YR5/2 シルト層 白色小パミス混

5a層上部で土器小片の広がり (土器溜まり) 検出

5b層：黒褐色 10YR3/2 シルト層 部分的に白色パミスが混ざり、一部は住居内埋土の可能性

5. 遺構

(1) 北区

北区では、4a層上面から4b層にかけて、3層土を主な埋土とする径5～10cm大の小凹穴が多数検出されており、植物根痕もしくは稲株痕の可能性もある。遺物はまばらに少量包含されているが、4b層上面に比較的多く出土する。また、西側の北1区では、5層上に粗砂と5層が混ざる層が堆積しており (SD1)、河川もしくは河川氾濫に伴う堆積物と思われる。そしてそのすぐ下から土器小片が敷きつめられたように広く出土している (PL.4・5)。上述のとおり、本調査では5層上面出土遺物を取り上げ精査した段階で調査終了となったが、配管撤去後の5層断面には薄く砂層が堆積している住居床面が認められ (5層上面より約55cm下方：PL.3)、周辺の調査と同様に、5層下方は部分的に住居内埋土であると考えられる。だが、住居壁の立ち上がりラインや、5層上面で平面的に住居プランを確認することはできなかった。

(2) 南区

3層上面では、大畦上部が調査区中央部に検出されている。4b層の上に形成されている大畦であり、4b層が水田の床土であった可能性がある。4a層上面から4b層にかけては、北区と同様に3層土を主な埋土とする径5～10cm大の小凹穴が多数検出されている。

そして、5層上面も北区と同様に土器小片が多数出土する。それらの土器小片を取り上げた後に精査を行ったが、住居等のプランは明瞭に確認できなかった。ただし、粘土塊が2カ所 (PL.5) に検出された。粘土塊には土器小片もふくまれているのが特徴である。隣接する2007-2 稲森アカデミー建設に伴う発掘調査では、古墳時代住居内床面や埋土内に粘土塊が出土している事例があり、本地点で出土した粘土塊もそれと類似する。

6. 遺物

遺物は、中コンテナ (60 × 40 × 15cm) 20箱の出土量であった。

2～4層の遺物出土点数は多くないが、4b層上面にて土師器や成川式土器片などの遺物が比較的多く出土する。最も遺物が多く出土するのは、北区・南区ともに5層上面である。これは土器溜まりの周辺部であると判断され、成川式土器・須恵器・礫・ビーズなどが出土しており、過去の周辺部の調査から、主に笹貫式の新しい段階の遺構と思われる。

7. まとめ

本調査の成果としては、過去に周辺部にて行われた調査と同様、中世・古代にさかのぼる田畑・水田跡と思われる土層や畦が確認された。そして北区の調査により、地形的には西側が高く東側が低くなっていることが判明しており、北1区では北側からの河川氾濫堆積 (SD 1) と思われる層や、5層断面では住居床面にてよく観察される薄い砂の堆積が認められ、古墳時代の集落がこのエリアにも分布している可能性が指摘できた。本地点の調査により、古墳時代における土地利用・集落構造の様相を示す事例が追加されたといえる。

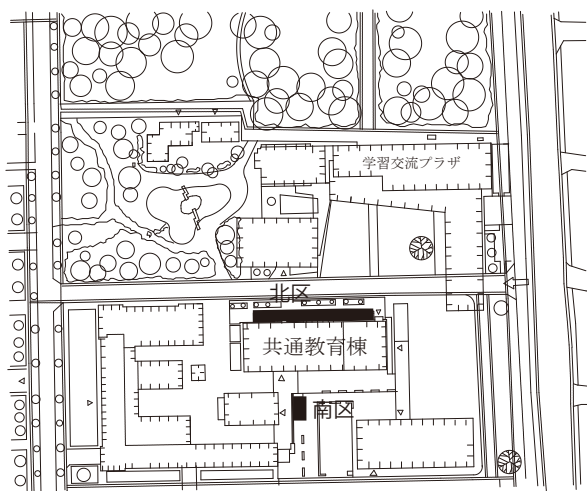
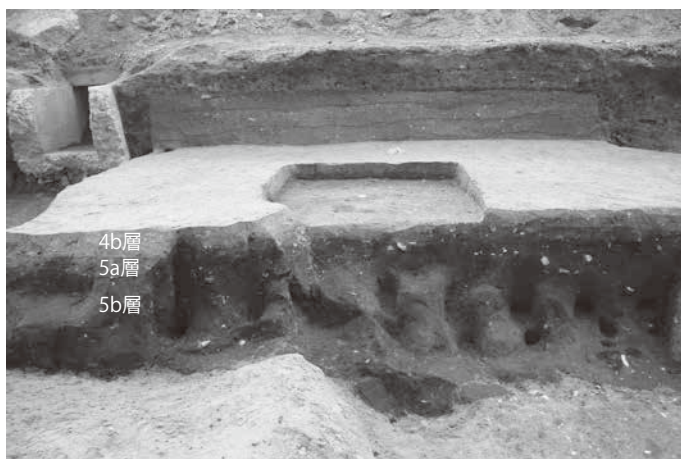
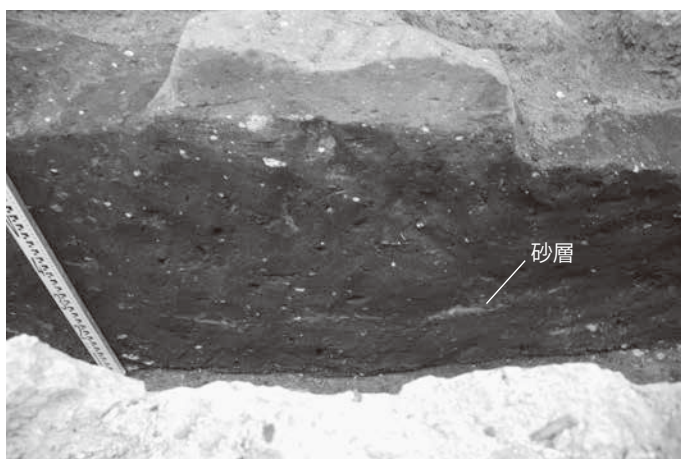


Fig. 6 2013-3 トレンチ位置図



北2区北壁



北1区南壁土層断面（住居床面か）

PL. 3 2013-3 北区土層

北3区

北2区

北2区

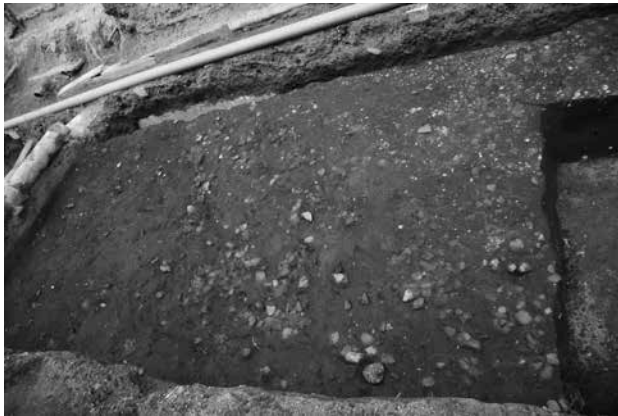
北1区

SD1

Fig. 7 2013-3 北区掘削範囲・検出遺構
(S = 1/200 北側太ライン包含層残存部分)



北区 SD1 ベルト



北区 5 層上面土器溜まり検出 (SD1 掘削後北から)



北区 5 層上面土器溜まり検出 (SD1 掘削後南から)



北区 完掘状況 (西から)



北区 完掘状況 (東から)

PL. 4 2013-3 北区遺構検出・完掘状況

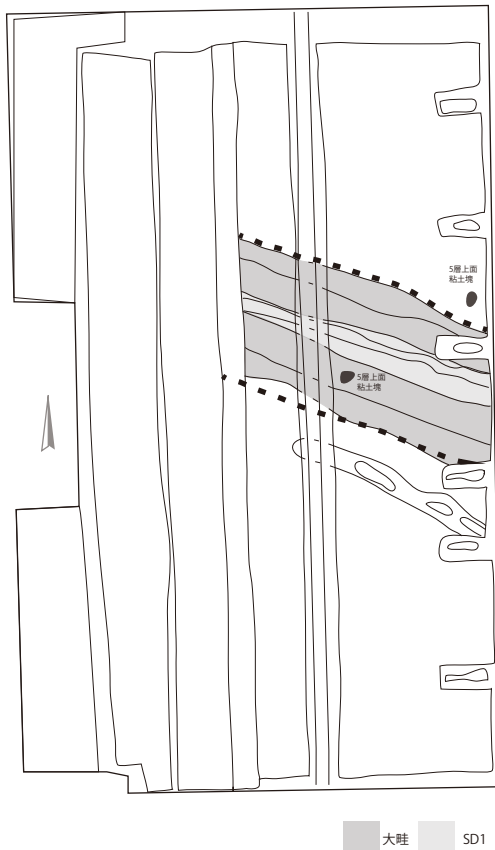


Fig. 8 南区検出遺構 (S=1/100)



南区表土剥ぎ



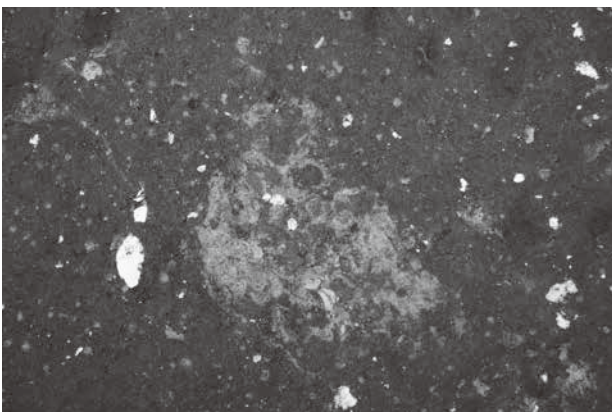
南区 南壁土層



南区4a層上面遺構検出



南区 5層上面土器溜まり



南区 5層上部検出粘土塊1



南区 中央ベルト (畦)

PL. 5 2013-3 南区遺構等検出状況

Ⅲ 試掘調査

2013-4 郡元団地 F - 6 区（保健管理センター増築用地）試掘調査

1. 調査にいたる経緯

鹿児島大学では保健管理センターの増築が予定された（工事深度 1.5m 予定）。この地点周辺では、北側に弥生時代の住居跡と近世の水田跡（農学部 1 号館中庭地点）、東側に近世の土取り穴（連大地点）があるものの、これまでの調査では同地点の土層データは得られていない状況であった。そのため、2014 年 1 月前半にボーリング調査によって 7 m 深度までの土層確認を行ったが、場所が悪く攪乱地点であり十分な土層データが得られなかった。そのため、試掘調査に切り替えて土層と遺構等を確認する調査を行うこととなった。

2. 調査体制

所在地 鹿児島市郡元 1-21-40

調査起因 電気電子工学科棟改修その他工事

発掘主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長 教授 新田栄治

発掘指導員 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 助教 新里貴之

管理技師 国際文化財株式会社 木村 満

作業員 安永政一，蔵本公一朗，桐木平雅代，芝田恵子

発掘期間 平成 26（2014）年 3 月 20 日～ 28 日

調査面積 約 4m²

3. 調査経過

3 月 20 日より花壇草木除去作業，25 日より重機による表土剥ぎを行い，2 層より人力にて掘削を行った。26 日には 3 c 層上面にて遺構（足跡・畦間跡か）が検出されたため，測量・写真撮影を行い，さらに 4 a 層上面（足跡・鋤跡か），6 層上面（ピット・土坑か）にて遺構を検出し，測量・写真撮影を行い，7 層（地山）途中で地表下 2 m 深度に達したため調査終了となった。27 日壁面清掃と写真撮影・測量を行い，重機により深堀を行い，28 日には全ての測量を終え，調査終了となった。

4. 基本層位

調査トレンチは花壇内であり，花壇上から 110m 深度までが攪乱層（1 層）であり，それから下位に近世～近代を中心とする未攪乱の遺物包含層（水田層）が確認され，180m 深度に及ぶ（2～5 層）。古墳時代の遺物包含層は，近世の水田層により削平されている状況であり，試掘地点では 10cm ほどの厚さで残存していた（6 層）。これは，農学部 1 号館中庭の土層状況と類似している。

1 層：近現代：攪乱層

2 層：暗褐色 10YR3/4 シルトに粗砂まじり 0.5～2cm 大のパミス混，やや脆い

3a 層：暗褐色 10YR3/3 シルト 0.5～1cm 大のパミス混，しまり良い 粘質。遺物小破片あり

3b 層：3a 層に黒褐色 10YR3/2 シルト混，しまり良い 粘質

3c 層：にぶい黄褐色 10YR4/3 細砂 0.5～1cm 大のパミス混，しまり悪い

3d 層：3c 層に黒褐色 10YR3/2 シルト混，しまり良い 粘質

3e 層：にぶい黄褐色 10YR5/3 細砂 しまり悪い

4a 層：にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト しまり良く，粘性強い

4b層：4a層よりわずかに明るい色調 あとは同じ

5a層：褐灰色 10YR4/1 よりやや明るい砂質シルト 0.5～1cm 大のパミス混，しまりやや悪い

5b層：褐灰色 10YR4/1 砂質シルト 0.5～1cm 大のパミス混，しまり良い

5c層：黄橙色 10YR7/8 砂質シルト 0.5～1cm 大のパミス混，しまり良い

6層：黒褐色 10YR2/2 砂質シルト 0.5～2cm 大のパミス混（多）しまり良い

7層：黄褐色 10YR5/8 細砂 上部はパミスがびっしりと分布する しまり悪い

5. 遺物

遺物は，古墳時代の土器片と思われるものが5層より出土しているが，水田整地のため1～5層にかけて近世・近代の陶磁器類が出土している。出土遺物数は多くなく小片も含めて30点弱であるが，5層内より比較的多く出土する状況であった。

6. まとめ

本地点は，農学部1号館中庭の状況に類似しており，近代・近世の水田層が幾度も営まれ，近世の水田層により弥生・古墳時代遺物包含層が削平されている状況がうかがえた。そして，調査地点内で削平されていない包含層が部分的に残っている可能性がある。そのため，本地点の工事においては発掘調査が必要であると判断される。

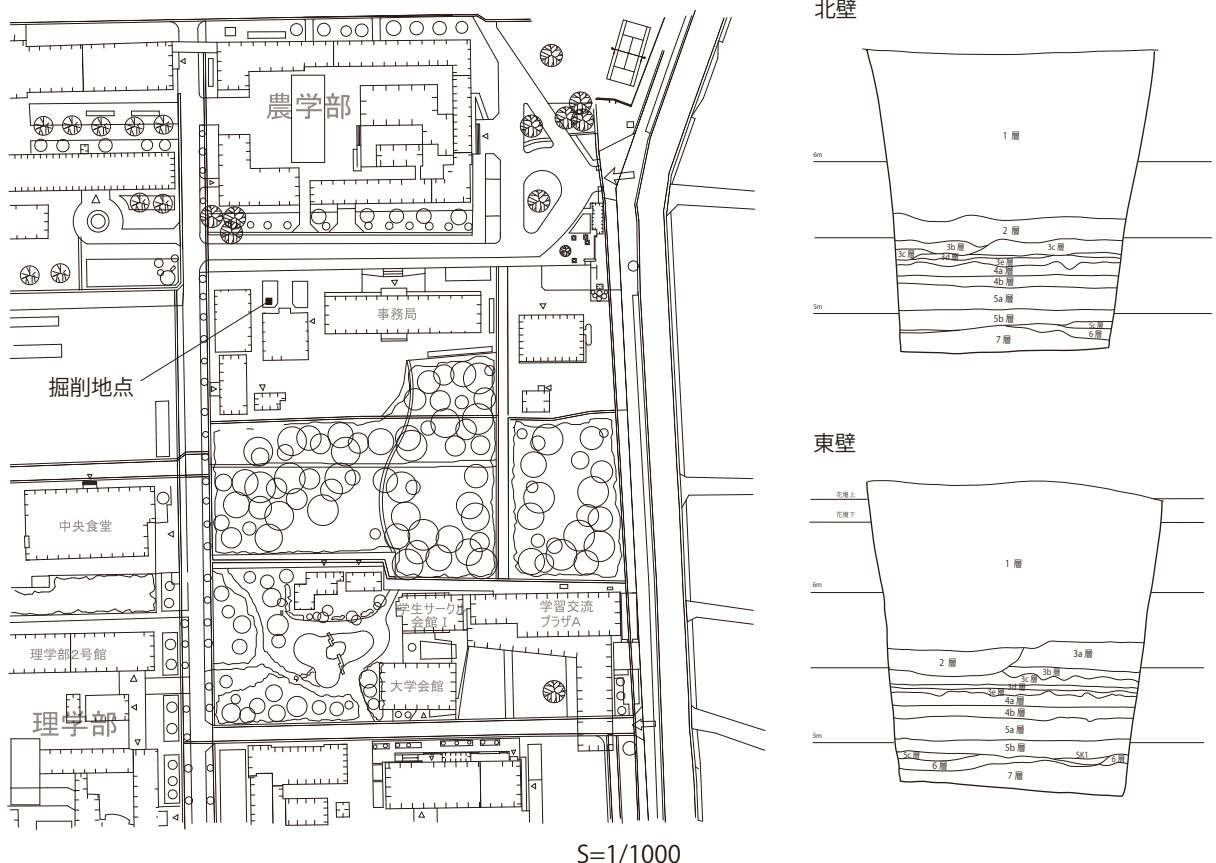
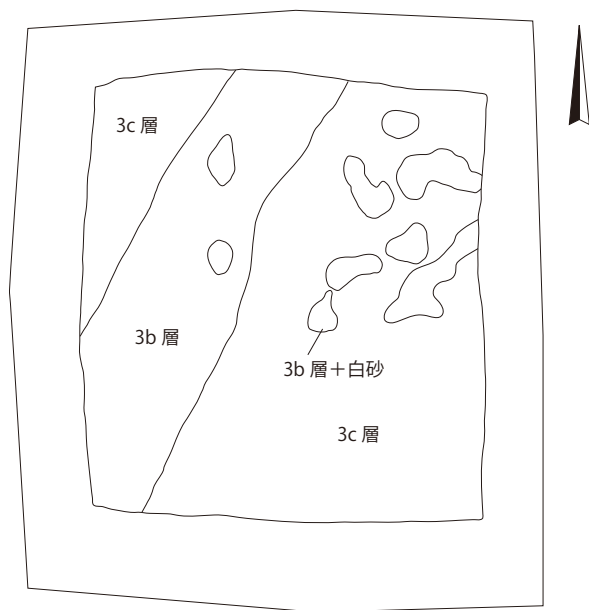
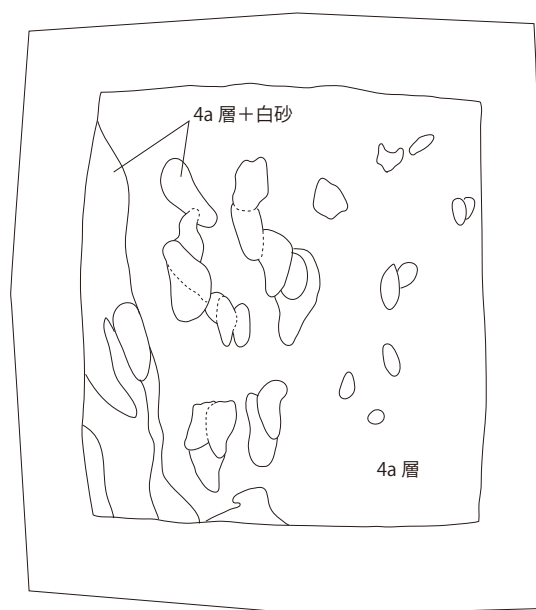


Fig. 9 2013-4 位置図・北壁東壁層位断面図 (S = 1/50)



3c 層上面



4a 層上面

Fig. 10 2013-4 遺構等検出図 (S=1/30)



東壁 土層断面



東壁 土層断面



北壁 土層断面



北壁 土層断面

PL. 6 2013-4 土層断面



ボーリング作業



ボーリング土層



花壇内掘削地点



重機による表土剥ぎ



表土内捨てコン



3 b 層除去後 足跡? 検出状況



3c 層上面遺構検出状況 南から



4a 層上面遺構検出状況 南から



5a 層上面検出状況 南から



6a 層上面遺構検出状況



6a 層上面検出遺構掘削状況



3 層出土陶磁器 南西壁面



重機による深掘 西壁面



完掘 南より



埋め戻し完了

PL. 8 2013-4 遺構検出・土層断面

Ⅳ 立会調査

平成 25（2013）年度は、郡元団地内で 6 件、桜ヶ丘団地内で 3 件、事業数としては合計 9 件の立会調査が計画され、8 件を実施した。2013- H については平成 26 年 4 月の実施となったため、次年度刊行の年報にて報告する。国立大学法人化後、調査は鹿児島市教育委員会が担当することになっており、埋蔵文化財調査センターがオブザーバーとして立会う。ガス漏れや漏水などの緊急時や双方の日程の都合のつかない場合は、埋蔵文化財調査センター単独で調査を行っている。以下にその概要を記す。

2013-A 桜ヶ丘団地 C・D－6・7 区（病棟新営工事・電気工事・機械設備工事）

調査地点 桜ヶ丘団地 C・D－6・7 区

調査期間 2012 年 6 月 4 日・6 月 14 日・9 月 13 日

調査担当 鹿児島市教育委員会 井口俊二・上村俊洋

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 寒川朋枝・中村直子

桜ヶ丘キャンパス内において、病棟建設に付随する外部工事（電気・機械設備工事、屋外療養施設フェンス設置工事）を実施することになった。a～e 地点は 6 月 4 日、f 地点は 6 月 14 日、g～i 地点は 9 月 13 日に立会調査を行った。

a・b 地点は側溝設置工事であり、a 地点は 50cm 深度、b 地点は 95cm 深度の掘削を行った。攪乱は a 地点では地表下 30cm、b 地点では地表下約 45cm に及び、その下位より包含層（縄文時代早期か）が認められ、さらに a 地点では地表下約 45cm、b 地点では地表下約 75cm で薩摩火山灰層が認められた。また a 地点では層位横転が認められた。c～e 地点は、屋外療養施設のフェンスを設置するためのコンクリ基礎部分であり、地表下 70～80cm の掘削を行った。各地点とも攪乱は 40～50cm に及んだが、e 地点ではアカホヤ層を確認した。遺物は、c 地点では 2 層より時期不明土器片が出土している。

f 地点は電気ハンドホール設置地点である。掘削深度は 1m で、地表下 20cm は攪乱層、その下位ではアカホヤ～薩摩火山灰上層の層位横転が認められる。

g～i 地点は電気配管敷設工事であり、3 地点はハンドホール設置のため地表下 130cm の掘削となった。攪乱層は北に行くほど深くなり、g 地点で約 1 m、i 地点で約 50cm 攪乱を受けている。g 地点では攪乱層下にアカホヤ火山灰が認められ、h・i 地点では攪乱層下にアカホヤ層上の包含層が残存していた。

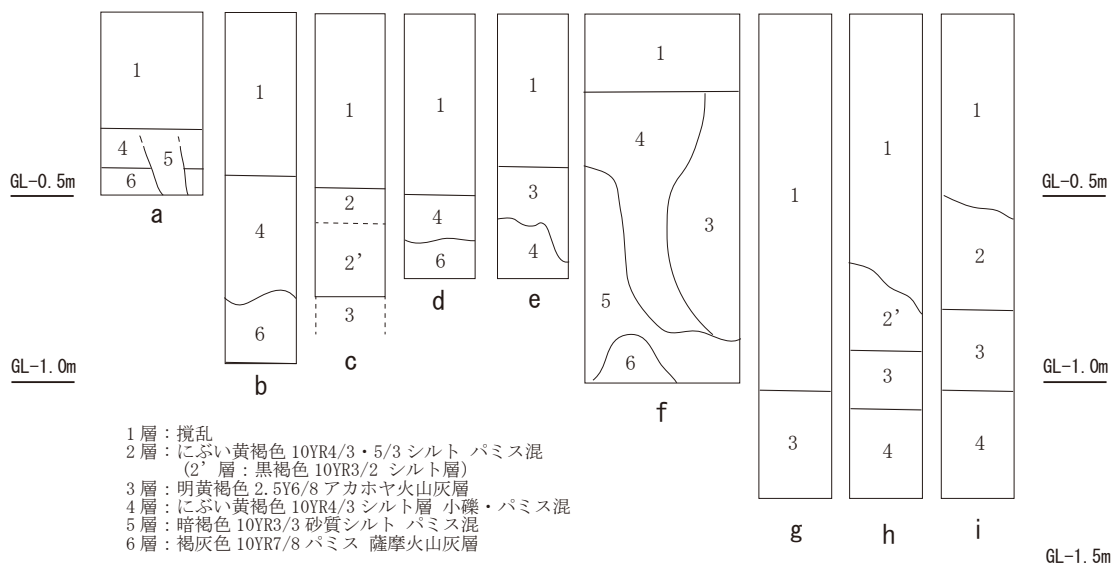


Fig. 11 2013-A 土層柱状図



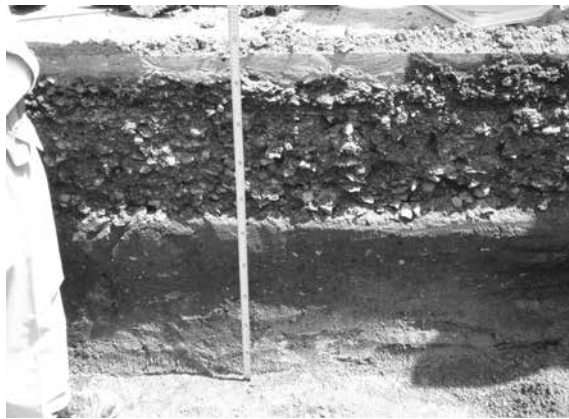
2013-A a地点 東より



2013-A a地点 西壁



2013-A b地点 南より



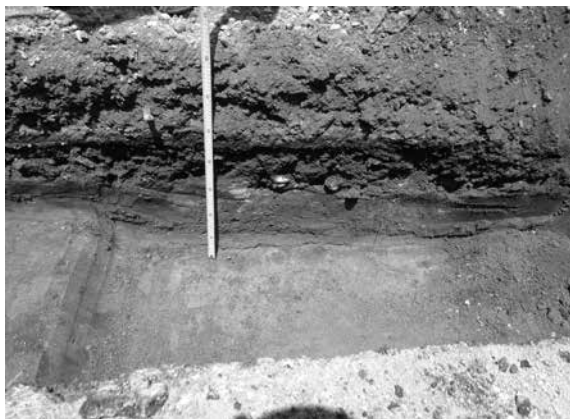
2013-A b地点 北壁



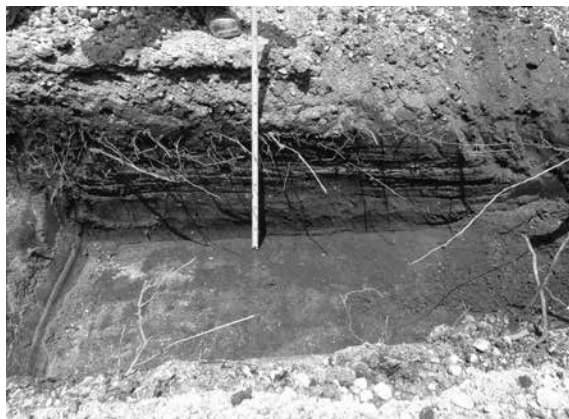
2013-A c地点 東壁



2013-A d地点



2013-A d地点 東壁



2013-A e地点 東壁

PL. 9 2013-A a～e 地点



2013-A f地点 北より



2013-A f地点 東壁

PL. 10 2013-A f 地点

2013-B 郡元団地 H・I-3～5 区（学習交流プラザ新営その他工事・電気機械設備工事）

調査地点 郡元団地 H・I-3～5 区

調査期間 2013 年 7 月 8・23 日, 8 月 21 日

調査担当 鹿児島市教育委員会 井口俊二

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 新里貴之・中村直子・寒川朋枝

郡元キャンパスにおいて、新たに建設された学習交流プラザに付随し、渡り廊下敷設等工事・電気機械設備工事が行われることになった。本地点の南側、総合研究教育棟地点では古墳時代の住居跡が密集して検出されており、2012 年に発掘調査が行われた学習交流プラザ建設エリアでも、南東部の教養門前付近では古墳時代の住居が密集して検出され、西側サークル棟建設エリアでは河川跡、東側学習交流プラザ A 棟エリアでは水田跡が検出され、本地点は当該期の集落構成や生業の様子を示す重要なエリアであることが判明している。これら周辺の調査から想定して、本掘削地点でも包含層が残存している可能性があると思われたため、立会調査を行うこととなった。a～e 地点は 2013 年 7 月 8 日, f～h 地点は 7 月 23 日, i 地点は 8 月 21 日に調査を行った。

a～c 地点は電気配線設置工事である。b・c 地点では地表下約 80cm より中世の水田層に該当する層が認められた。a 地点では 4b 層下部より成川式土器と思われる甕の脚部片, b 地点でも 2 層より成川式土器小片 1 点が出土している。d・e 地点は機会設備工事に伴う掘削地点であり、2 層が確認された。2 層は近世の水田層の可能性はあるが、河川跡にも近いいため河砂と思われる砂が土層に含まれている。また遺物の出土はみられなかった。

f～h 地点は電気設備工事に伴う掘削であり、f・g 地点は外灯設置のため掘削深度は f 地点 150cm, g 地点 140cm である。a～c 地点の南側に関しては、渡り廊下敷設部分と一部重複しているが、電気設備工事掘削深度はそれよりやや深く計画されていたため、電気配管敷設に伴う掘削深度までの立会調査となった。h 地点は、道路に面する共同溝に配線を引き込むため、特に南側で掘削深度 110cm となった。各地点の土層は Fig.13 に示す通りである。f～h 地点とも、5 層は古代～古墳時代にいたる遺物包含層であり、5 層上面からは多数の土器小片が敷きつめられたように出土した。また、g・h 地点では住居埋土や貼床と思われる土層が確認され、遺物の出土も多くみられた。a～c 地点の南側は電気設備設置のため南北に伸びる掘削を行ったが、北半部は攪乱を受けており、ごく一部、北東角のみに中世耕作土層が残存していた。南側では古代以降のものと思われる土坑 1 基が検出されている。道路寄り h 地点では包含層が残存しており、南壁土層では、地表下 60cm で古墳時代遺物包含層が確認された。そして、g・h 地点では住居の貼床と思われる 5 層を主体とする攪拌されたような土層や、掘床のラインが認められた。また、f～h 地点の土層から、

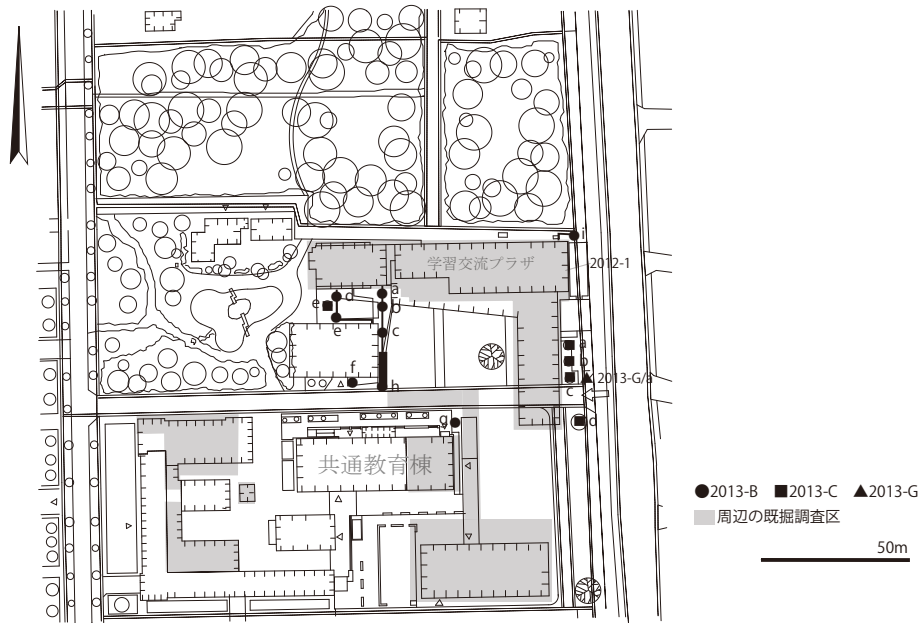


Fig. 12 2013-B・C・D 掘削地点

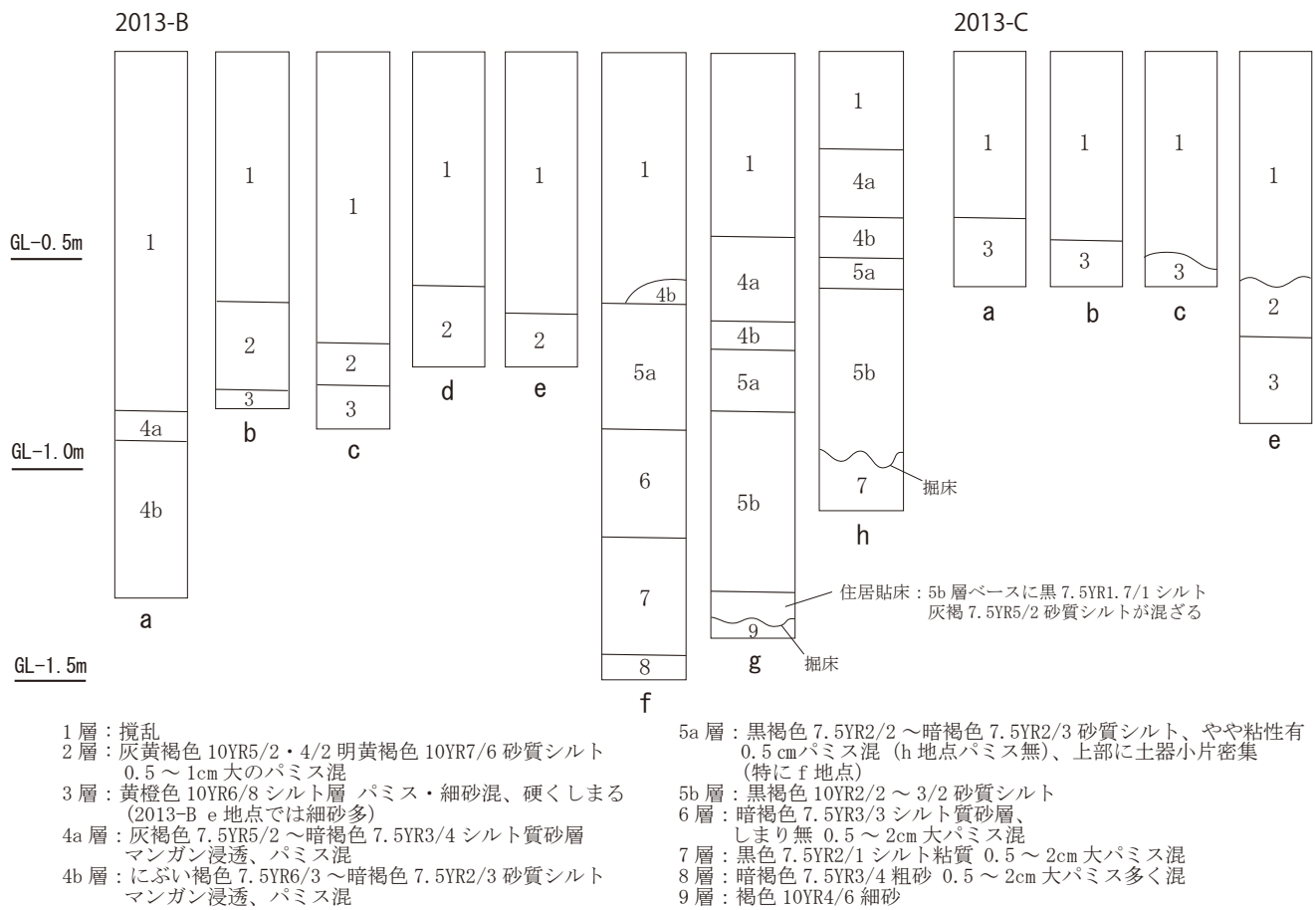


Fig. 13 2013-B・C 土層柱状図

本エリアでは古墳時代包含層は東に向かって低くなるように傾斜していると判断される。

i 地点は電気配線設置工事に伴う掘削が行われた。立会調査にて、地表下 75cm ほど掘り下げたが、攪乱層であった。

立会調査 2013-B において出土した遺物を Fig.14～16 に示す。出土遺物総量は中パンケース 1 箱分弱で、各地点毎の遺物量は、f 地点で成川式土器片 17 点（約 170g）、g 地点で成川式土器（主体）・弥生土器片 180 点（弥生土器 3 点、成川式甕口縁 9 点他、総重量約 2.1kg）、h 地点で約 350 点（弥生土器 5 点、成川式甕口縁部 7 点他、総重量約 6.4kg）であった。遺物は主に g・h 地点より出土している。その大半は、5 層上面から出土している小片が殆どであるため、詳細な器種等不明なものが多い。また、成川式土器についても小片がほとんどであるため全体の形状が判明する資料はないが、周辺から出土する成川式土器も篋貫式が主体となっており、本地点においても同様の様相を示している。各遺物の様相について述べる。

1 は a 地点 5 層下部より出土した甕の脚部である。2 は b 地点 2 層より出土した淡緑色半透明の丸善インク瓶であり、裏面に M 字、その上下に「登録」と陽刻されている。3 は f 地点 3 層上面より出土した甕口縁部小片である。

No.4～18 の遺物は、g 地点出土遺物である。4 は弥生時代中期と思われる壺の平底底部である。No. 5～7 は、成川式土器の甕口縁部である。5・6 は外面に煤が付着する。No. 8・9 は甕突帯部であり、外面には煤の付着が認められる。No.10～12 は甕底部である。脚部が外れた状態のもので、接合部分には指跡が認められる。10・12 の底部内面は、コゲにより黒くなっている。また、12 は甕の脚内部に一文字に粘土紐が貼付けられており、指頭痕が認められる。13 は壺の胴部突帯である。No.14～16 は壺底部である。17 は高坏坏底部である。外面は赤色塗布されているが部分的に剥落している。坏接合部分は、底部中央がやや膨らんだ形状を呈する。18 は薄手の須恵器片であるが、器種不明である。内面には工具叩き痕、外面には自然釉が付着している。

No.19～55 は h 地点出土土器であり、主に 5 層上面で多数出土している。19 は弥生土器甕の突帯部であり、外面には煤が付着している。20・21 は弥生中期壺の平底底部である。22～33 は甕の口縁部・突帯部である。突帯は絡状突帯が殆どであるが、29 は工具を押し付けたようなくぼみも認められる。23 は内面側に粘土輪積痕が認められる。35～37 は甕底部であり、接合部分が明瞭に分かる資料である。35 は平底に脚部を接合し、36 は内側に短い突起を作り出し、脚部を接合させている。38～43 は甕の脚部である。特に 38・41 などは脚内面側に接合痕が認められる。44～50 は壺である。46・47 は頸部であり、47 は竹管文が施された突帯が巡る。48～50 は壺底部であるが、50 は接合痕跡が認められる。51・52 は高坏であり、51 は坏底部、52 は脚端部であり、外面には赤色が塗布されている。53・54 は小型精製土器であり、坩などの口縁部と思われる。54 はミガキが施されている。55 は軽石加工品である。部分的に欠損しているが、6.1×5.2cm の大きさで、中央部はゆるくくぼんでいる。

2013-C 郡元団地 I-3～5 区（学習交流プラザ新営その他工事）

調査地点 郡元団地 I- 3～5 区

調査期間 2013 年 8 月 21 日

調査担当 鹿児島市教育委員会 上村俊洋

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 寒川朋枝

郡元キャンパスでは、学習交流プラザ周辺整備に伴い、樹木移植工事を行うことになった。本掘削地点は、学習交流プラザの東側 a～d 地点、西側 e 地点である（Fig.12）。2013-B 地点同様、周辺部では縄文時代から近世までの包含層が認められる地点であり、特に古墳時代の集落・水田跡などの遺構が検出されていることから立会調査を行うこととなった。今回は、a～e 地点 5 ケ所に植栽を行う目的での掘削となり、地表面より約 55～88cm 掘削した。

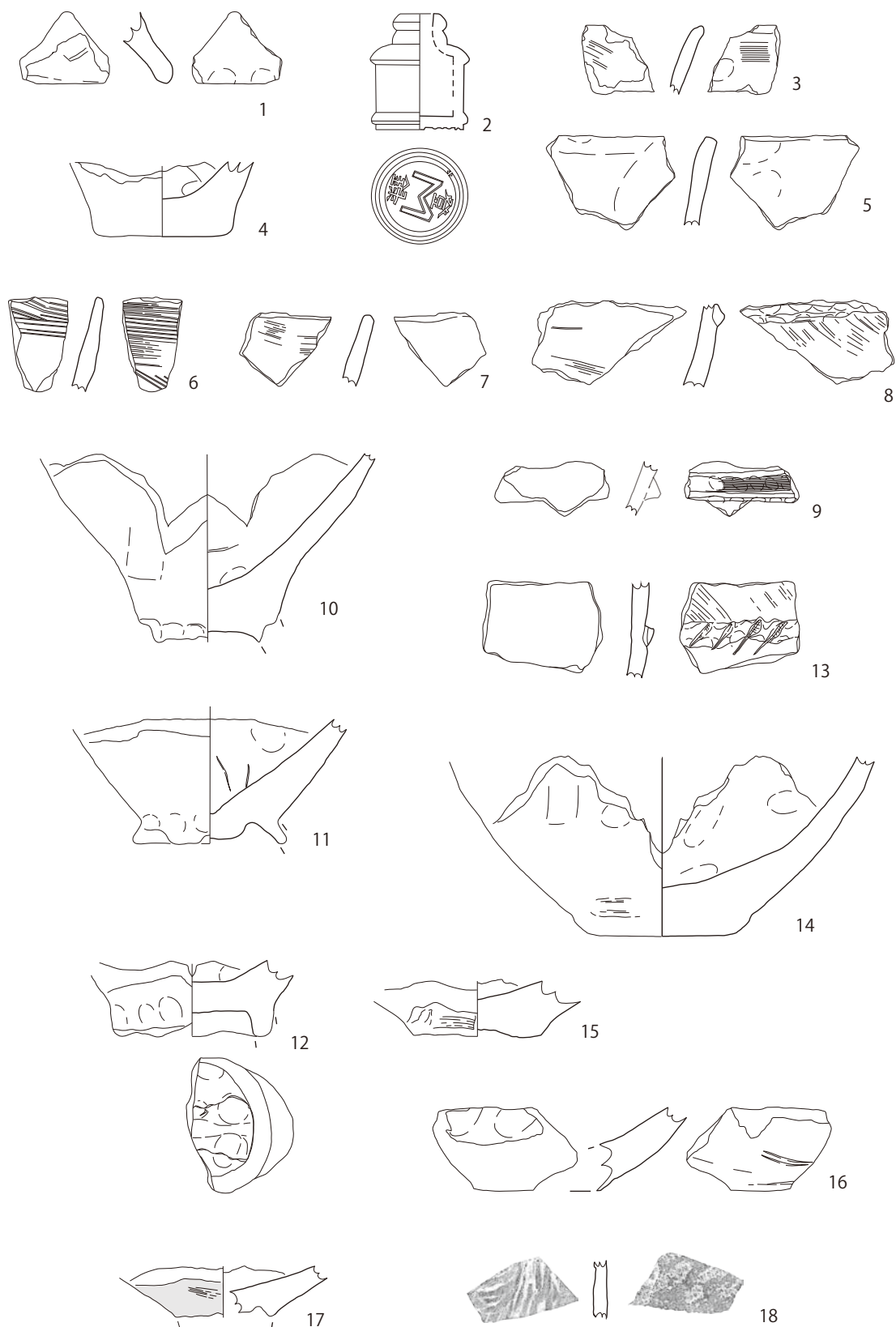


Fig. 14 2013-B 出土遺物

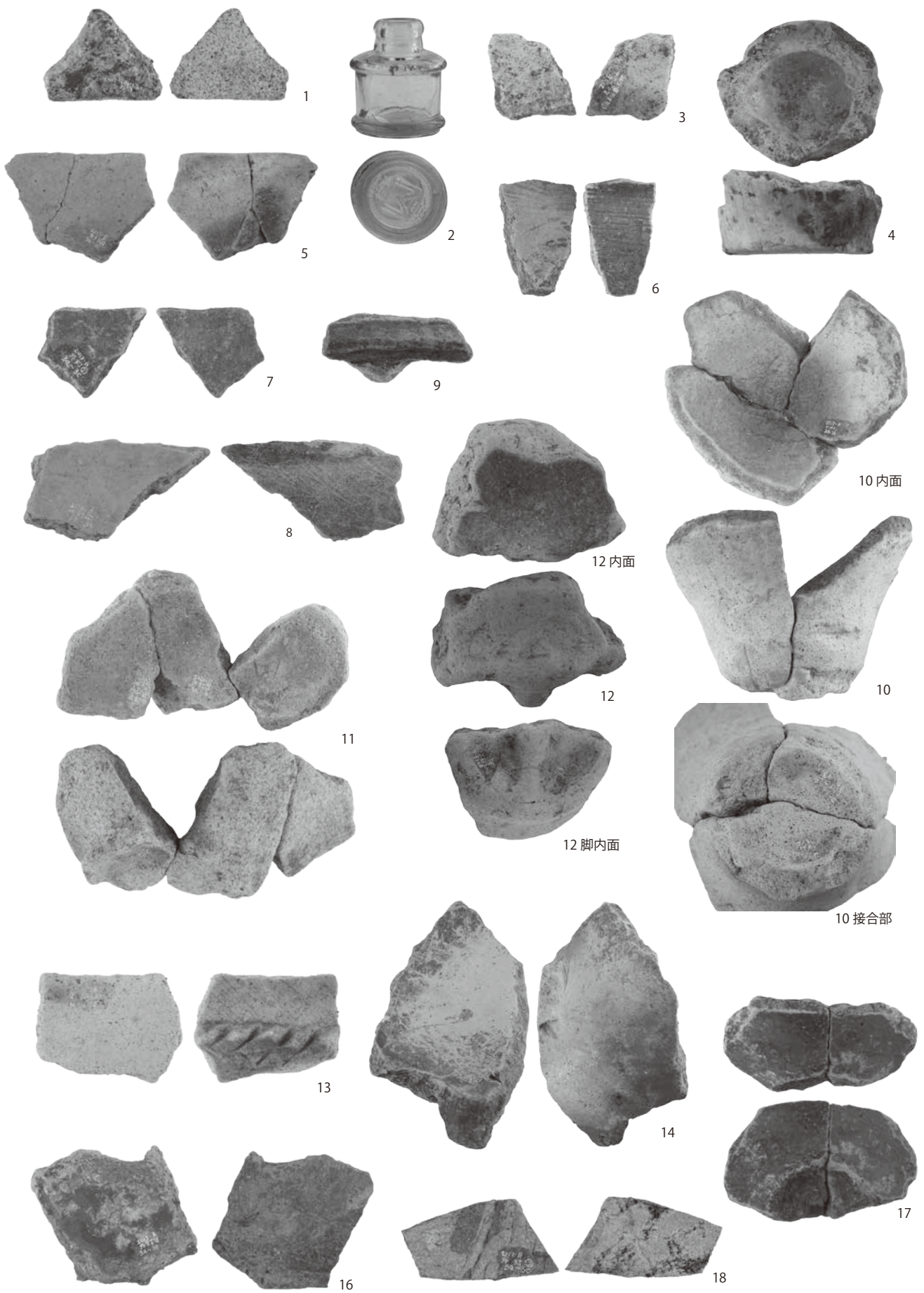
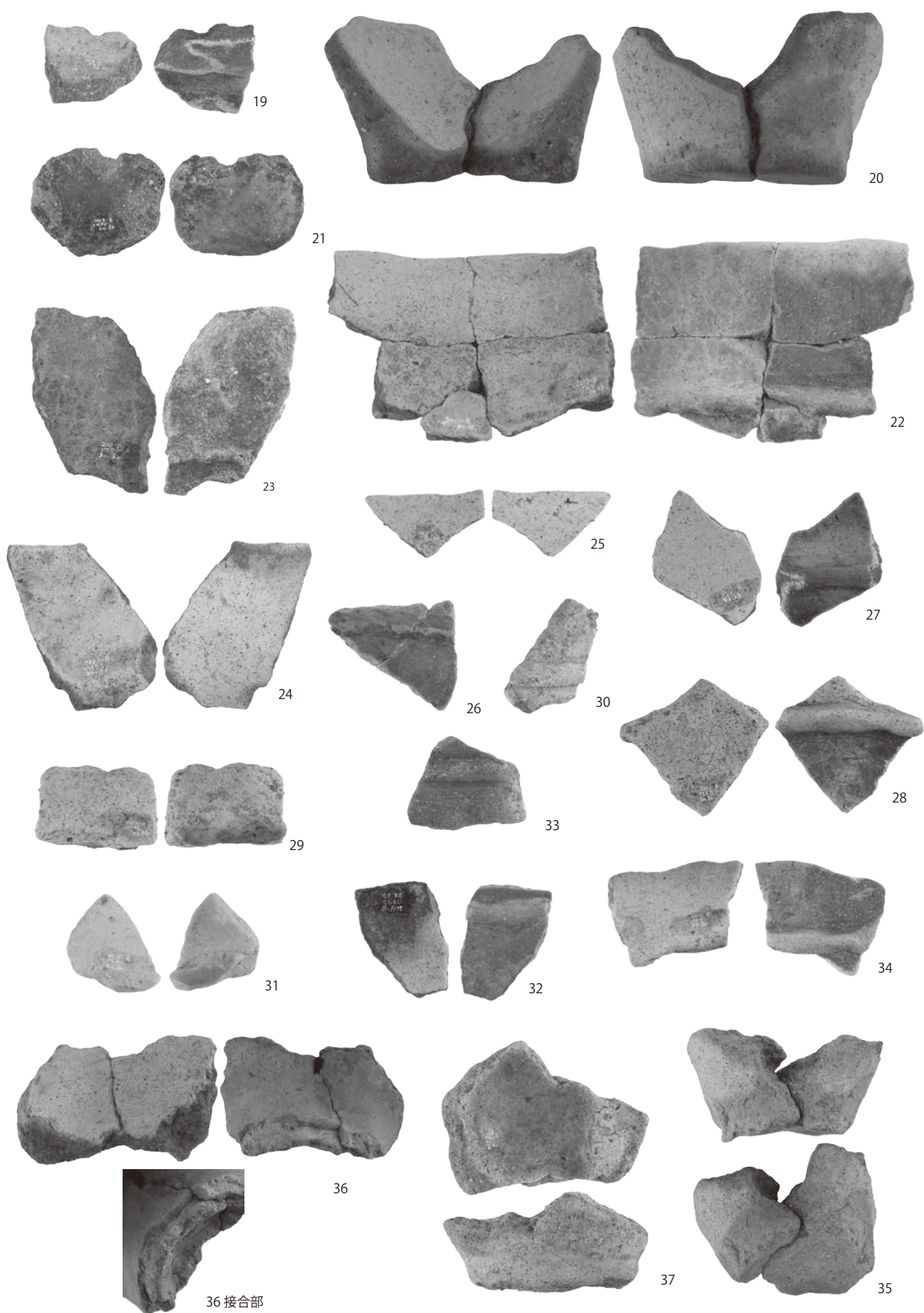




Fig. 15 2013-B 出土遺物



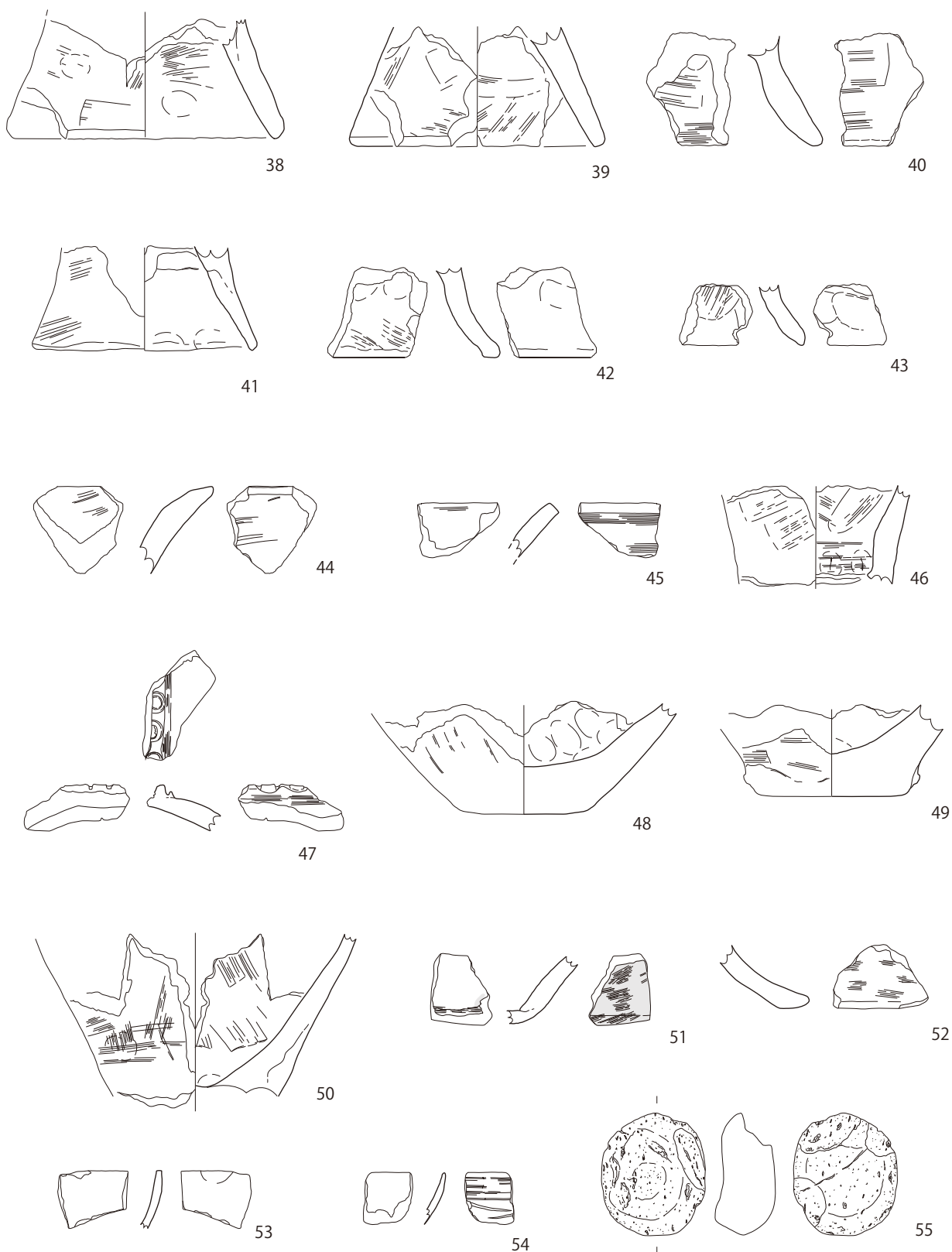
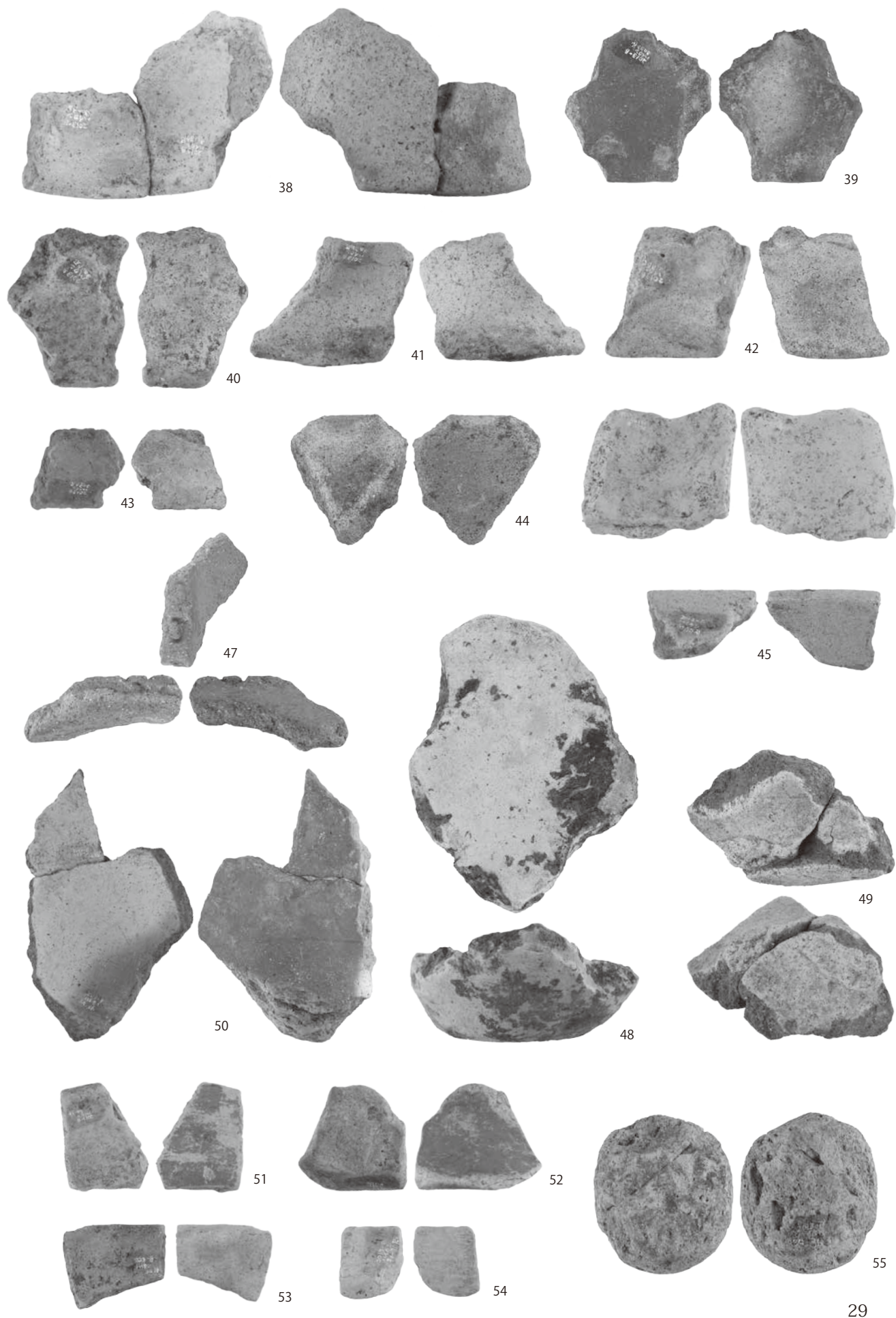


Fig. 16 2013-B 出土遺物



PL. 13 2013-B 出土遺物

Tab. 2 2013-B 出土遺物一覧

Fig.	No	出土地点	層位	種別	器種	部位	色調	胎土混和	調整	備考
	1	a 地点	4b 下	成川式	甕	脚部	外面：浅黄橙 10YR8/3 内面：にぶい黄橙 10YR7/3 器肉：灰黄褐 10YR6/2	黒色粒，白色粒 角閃石，石英	外面：ユビオサエ 内面：ハケナデ	
	2	b 地点	2	ガラス製品	インク瓶	(器高 5.5cm, 口径 2cm, 底径 4.2cm)				
	3	f 地点	5 上	成川式	甕	口縁部	外面：にぶい黄橙 10YR6/4 内面：にぶい黄橙 10YR7/4 器肉：褐灰 10YR5/1	石英 角閃石 赤色粒	内外面：ナデ (ー, \)	
	4	g 地点	5a ~ 5c	弥生土器	壺	底部	外面：浅黄橙 10YR8/3 内面：にぶい黄橙 10YR7/2 器肉：褐灰 10YR6/1	黒色粒 白色粒	外面：ナデ () 内面：ナデ, ユビアト	外面スス付着
	5	g 地点	5a ~ 5c	成川式	甕	口縁部	外面：にぶい黄橙 10YR7/2 内面：にぶい黄橙 7.5YR6/4 器肉：褐灰 10YR6/1	石英 黒色粒 白色粒 赤色粒	内外面：ユビオサエ ユビナデ	外面スス付着
	6	g 地点	5a ~ 5c	成川式	甕	口縁部	外面：褐灰 10YR4/1 内面：にぶい黄橙 10YR7/3 器肉：褐灰 10YR6/1	石英 角閃石 小礫	外面：ハケナデ (ー) 内面：ハケナデ (ー, \)	外面スス付着
	7	g 地点	5a ~ 5c	成川式	甕	口縁部	外面：にぶい黄褐 10YR5/4 内面：にぶい黄褐 10YR4/3 器肉：灰黄褐 10YR5/2	石英 角閃石 黒色粒	内外面：ナデ (ー)	
	8	g 地点	5a ~ 5c	成川式	甕	突帯部	外面：にぶい橙 7.5YR6/4 内面：にぶい黄橙 10YR6/4 器肉：にぶい橙 7.5YR6/4	石英 軽石	外面：ハケナデ (\) 内面：ハケナデ (ー)	外面スス付着
14	9	g 地点	5a ~ 5c	成川式	甕	突帯部	外面：にぶい黄橙 10YR7/3 内面：にぶい黄橙 10YR7/4 器肉：褐灰 10YR 5/1	石英 角閃石 黒色粒	外面：ハケナデ (ー) 内面：ナデ	外面スス付着
	10	g 地点	5a ~ 5c	成川式	甕	底部	外面：浅黄橙 10YR8/3 内面：にぶい黄橙 10YR7/3 器肉：褐灰 10YR 5/1	角閃石 白色粒 黒色粒	外面：ナデ () 内面：ユビナデ ユビオサエ	
	11	g 地点	5a ~ 5c	成川式	甕	底部	外面：浅黄橙 10YR8/3 内面：黄灰 2.5Y5/1 器肉：黄灰 2.5Y5/1	石英 角閃石 黒色粒 白色粒 赤色粒	外面：ユビオサエ 内面：ユビオサエ 工具打込痕	
	12	g 地点	5a ~ 5c	成川式	甕	底部	外面：浅黄橙 10YR8/3 内面・器肉：褐灰 10YR5/1 脚内面：にぶい黄橙 10YR7/3	石英 角閃石 軽石粒 黒色粒	内外面：ユビオサエ 脚内面：粘土紐貼付	内面スス付着
	13	g 地点	5a ~ 5c	成川式	壺	胴部	外面：にぶい黄橙 10YR6/3 内面：にぶい黄橙 10YR7/4 器肉：にぶい黄橙 10YR7/2	石英 角閃石 黒色粒	外面：ハケナデ (\) 内面：ナデ	外面スス付着
	14	g 地点	5a ~ 5c	成川式	壺	底部	外面：にぶい黄橙 10YR7/3 内面：浅黄橙 10YR8/3 器肉：褐灰 10YR6/1	石英 角閃石 黒色粒 白色粒	内外面：ナデ, ユビナデ	
	15	g 地点	5a ~ 5c	成川式	壺	底部	外面：にぶい黄橙 10YR6/3 内面：灰黄褐 10YR6/2 器肉：灰黄褐 10YR5/2	石英 角閃石 軽石粒	外面：ハケナデ (ー) 内面：ユビナデ	
	16	g 地点	5a ~ 5c	成川式	壺	底部	外面：にぶい褐 7.5YR5/4 内面：にぶい褐 7.5YR5/3 器肉：褐灰 10YR6/1	礫, 石英 角閃石, 白色粒	外面：ナデ 内面：ユビナデ	
	17	g 地点	5a ~ 5c	成川式	高坏	坏部	外面：赤褐 2.5YR4/6 内面：にぶい黄褐 10YR5/3 器肉：灰黄褐 10YR6/2	角閃石, 白色粒 石英	外面：ミガキ 内面：ナデ	外面赤色塗布
	18	g 地点	5a ~ 5c	須恵器		胴部	外面：灰 5Y6/1 内面・器肉：黄灰 2.5Y6/1	白色粒	内面：工具痕	外面自然釉 オリープ黒
	19	h 地点	5a ~ 5b	弥生土器	甕	胴部	外面：にぶい黄橙 10YR7/3 内面：灰白 10YR7/1 器肉：黒褐 2.5Y3/1	石英 角閃石 黒色粒, 白色粒	外面：ハケナデ (ー) 内面：ナデ	外面スス付着
	20	h 地点	5a ~ 5b	弥生土器	壺	胴部	外面：浅黄橙 10YR8/3 内面：浅黄橙 10YR8/4 器肉：黄灰 2.5Y5/1	角閃石, 軽石粒 黒色粒, 白色粒	外面：ユビオサエ, ハケナデ 内面：ユビアト	
	21	h 地点	5a ~ 5b	弥生土器	壺	胴部	外面器肉：にぶい黄褐 10YR5/3 内面：褐灰 10YR4/1	石英, 軽石粒 白色粒	外面：ナデ (ー) 内面：ハケ打込痕	
	22	h 地点	5a ~ 5b	笹貫式	甕	口縁部	外面：褐灰 10YR4/1 内面：浅黄橙 10YR7/3 器肉：褐灰 10YR5/1	石英, 角閃石 白色粒	外面：ユビナデ ハケナデ (ー,) 内面：ユビアト, ハケナデ (\, /)	
15	23	h 地点	5a ~ 5b	笹貫式	甕	口縁部	内外面：灰黄褐 10YR6/2 器肉：褐灰 10YR5/1	石英, 軽石粒 白色粒	外面：ナデ (ー) ユビオサエ 内面：ナデ, ユビオサエ	
	24	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甕	口縁部	外面：灰白 2.5Y8/2 内面：灰黄 2.5Y7/2 器肉：黄灰 2.5Y5/1	角閃石, 黒色粒 石英	内外面：ナデ (ー) ユビアト	
	25	h 地点	5a ~ 5b	成川式	鉢	口縁部	内外面：浅黄橙 10YR8/3 器肉：褐灰 10YR5/1	石英, 角閃石 赤色粒	内外面：ナデ ユビアト	
	26	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甕	口縁部	外面：灰黄褐 10YR4/2 内面器肉：にぶい橙 7.5YR7/4	石英, 角閃石 黒色粒, 赤色粒	内外面：ナデ	
	27	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甕	胴部	外面：にぶい黄橙 10YR5/4 内面：橙 7.5YR7/6 器肉：褐 10YR4 /1	石英, 角閃石 黒色粒, 白色粒 赤色粒	内外面：ナデ (ー)	

Tab. 3 2013-B 出土遺物一覧

Fig. No	出土地点	層位	種別	器種	部位	色調	胎土混和	調整	備考
28	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	胴部	外面：にぶい黄橙 10YR6/4 内面：にぶい黄橙 10YR7/4 器肉：褐 10YR4/1	石英, 角閃石 黒色粒, 白色粒 赤色粒	外面：ハケナデ (ー) 内面：ナデ	外面スス付着
29	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	胴部	外面：にぶい黄橙 10YR7/4 内面器肉：浅黄橙 10YR8/4	礫, 石英, 角閃石 黒色粒	外面：ナデ (\\) 内面：ナデ (／)	外面スス付着
30	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	胴部	外面：灰白 10YR7/1 内面：にぶい黄橙 10YR7/4 器肉：褐灰 10YR6/1	角閃石, 黒色粒 白色粒	外面：ナデ (ー) 内面：ナデ	
31	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	胴部	外面：にぶい黄橙 10YR7/3 内面器肉：浅黄橙 10YR8/3	黒色粒, 白色粒	内外面：ナデ	
15 32	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	胴部	外面：黒褐 10YR3/1 内面：にぶい黄橙 10YR7/3 器肉：褐灰 10YR5/1	石英, 角閃石 黒色粒, 白色粒 赤色粒	外面：ハケナデ (\\) 内面：ナデ (ー)	
33	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	胴部	外面：黒褐 2.5Y3/1 内面：黄灰 2.5Y6/2 器肉：黄灰 2.5Y5/1	石英, 角閃石 黒色粒, 白色粒	外面：ナデ (ー) 内面：ナデ	
34	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	胴部	外面：黒褐 10YR3/1 内面：にぶい黄橙 10YR7/4 器肉：褐灰 10YR6/1	石英, 角閃石 黒色粒, 白色粒	外面：ナデ (／) 内面：ユビナデ	外面スス付着
35	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	底部	外面：浅黄橙 7.5YR8/4 内面：明褐灰 7.5YR7/2 脚台内面：にぶい橙 7.5YR7/4 器肉：橙 2.5YR7/6	石英, 角閃石 黒色粒, 白色粒	外面：ユビナデ (ー) 内面：ユビオサエ	外面スス付着
36	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	底部	外面：橙 2.5YR7/6 内面：浅黄橙 10YR8/4 脚台内面：にぶい黄橙 10YR7/3 器肉：褐灰 10YR6/1	石英, 角閃石 黒色粒, 白色粒	外面：ハケナデ (\\) 工具打込痕 内面：ユビオサエ ナデ	
37	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	底部	外面：浅黄橙 7.5YR8/4 内面：にぶい褐 7.5YR6/3 器肉：にぶい黄橙 10YR6/3	礫, 石英, 角閃石 黒色粒, 白色粒 赤色粒	外面：ナデ 内面：ナデ (ー) ユビオサエ	
38	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	脚部	外面：にぶい黄橙 10YR7/4 内面器肉：橙 2.5YR7/6	礫, 石英, 角閃石 黒色粒, 白色粒	外面：ナデ (ー) 内面：ナデ, ユビオサエ	
39	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	脚部	外面：灰 5YR4/1 内面：黄灰 2.5YR4/1 器肉：暗灰黄 2.5Y5/2	石英, 角閃石 黒色粒, 白色粒	内外面：ナデ (ー, /)	
40	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	脚部	外面：にぶい黄橙 10YR7/4 内面：にぶい橙 7.5YR6/4 器肉：橙 5YR6/6	角閃石, 軽石粒 白色粒	外面：ナデ (ー) 内面：ユビアト, ナデ (ー)	
41	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	脚部	内外面：浅黄橙 10YR8/3 器肉：橙 2.5YR7/6	石英, 軽石粒 黒色粒, 白色粒	外面：ナデ (／) 内面：ナデ, ユビオサエ	
42	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	脚部	内外面：にぶい黄橙 10YR7/4 器肉：浅黄橙 10YR8/3	石英, 角閃石 白色粒	内外面：ナデ	
43	h 地点	5a ~ 5b	成川式	甗	脚部	外面：にぶい橙 7.5YR7/4 内面：にぶい橙 7.5YR6/4 器肉：橙 2.5YR6/6	角閃石, 白色粒	外面：ユビアト 内面：ナデ (\\)	
16 44	h 地点	5a ~ 5b	成川式	壺	口縁部	外面：橙 2.5YR6/6 内面：灰白 10YR8/2 器肉：橙 2.5YR7/6	石英, 角閃石 軽石粒, 赤色粒	内外面：ナデ (ー)	
45	h 地点	5a ~ 5b	成川式	壺	口縁部	内外面：にぶい黄橙 10YR7/4 器肉：灰黄褐 10YR6/2	石英, 角閃石 白色粒	内外面：ナデ	
46	h 地点	5a ~ 5b	成川式	壺	頸部	内外面：にぶい黄橙 10YR7/3 器肉：灰白 10YR8/2	石英, 角閃石 黒色粒, 赤色粒	外面：ナデ (ー) 内面：ユビナデ, ナデ (ー)	
47	h 地点	5a ~ 5b	成川式	壺	頸部	外面：橙 7.5YR6/6 内面：明褐 7.5YR5/6 器肉：にぶい橙 7.5YR7/4	石英, 角閃石 軽石粒, 黒色粒 白色粒	外面：ナデ (ー) 内面：ナデ	
48	h 地点	5a ~ 5b	成川式	壺	底部	内外面：浅黄橙 10YR8/3 器肉：灰白 10YR7/1	石英, 黒色粒	外面：ナデ () 内面：ユビアト	
49	h 地点	5a ~ 5b	成川式	壺	底部	外面：浅黄 2.5Y7/3 内面：灰黄 2.5YR7/2 器肉：黄灰 2.5YR4/1	礫, 石英 角閃石, 白色粒	外面：ナデ (ー) 内面：ナデ	
50	h 地点	5a ~ 5b	成川式	壺	底部	外面：灰 5Y4/1 内面：浅黄 2.5Y7/3 器肉：灰 5Y5/1	石英, 角閃石 茶色粒	外面：ナデ (ー) 内面：ハケナデ (\\)	
51	h 地点	5a ~ 5b	成川式	高坏	坏部	外面：明赤褐 2.5YR5/6 内面器肉：にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石, 白色粒	外面：ミガキ 内面：ナデ	外面赤色塗布
52	h 地点	5a ~ 5b	成川式	高坏	脚部	外面：明赤褐 2.5YR5/6 内面：灰黄褐 10YR5/2 器肉：灰白 10YR7/1	石英, 黒色粒 白色粒	外面：ミガキ 内面：ナデ (ー)	
53	h 地点	5a ~ 5b	成川式	埴か	口縁部	外面：にぶい黄橙 10YR6/3 内面器肉：にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石, 黒色粒 白色粒	内面：ミガキ	
54	h 地点	5a ~ 5b	成川式	埴か	口縁部	内外面：にぶい黄橙 10YR7/3 器肉：浅黄橙 10YR8/3	石英	内外面：ミガキ (ー)	



2013-B a 地点掘削状況



2013-B a 地点北壁土層



2013-B b 地点掘削状況



2013-B b 地点土層



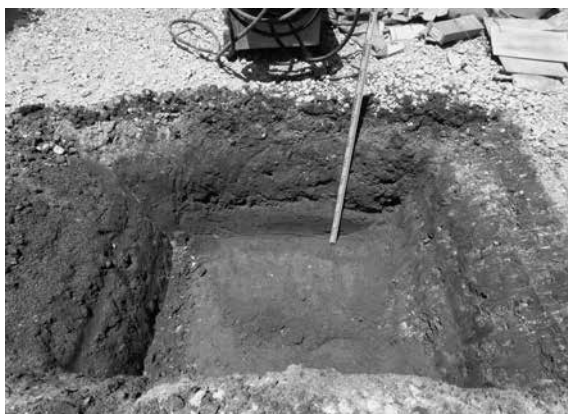
2013-B c 地点掘削状況北から



2013-B c 地点西壁土層



2013-B d・e 地点掘削状況



2013-B d 地点西壁土層

PL. 14 2013-B a～e 地点



2013-B e 地点西壁土層



2013-B i 地点掘削状況



2013-C a～c 地点掘削状況南から



2013-C a 地点土層



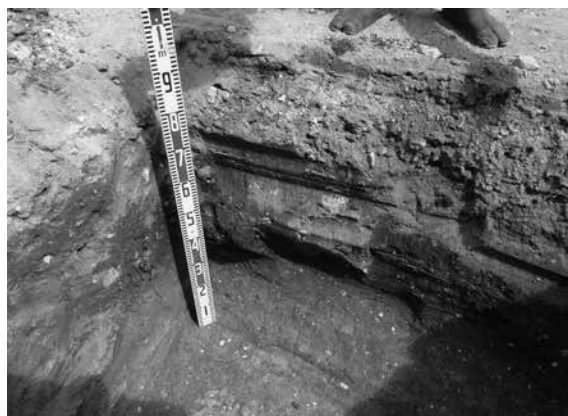
2013-C b 地点土層



2013-C c 地点土層



2013-C e 地点掘削状況南から



2013-C e 地点土層

PL. 15 2013-B e・i 地点 2013-C a～e 地点

a～c 地点では、地表下約 55cm の掘削を行った。a 地点では地表下約 50cm、b 地点では地表下約 45cm、c 地点では地表下約 40cm が攪乱層であった。その下位層は中世の水田・畠層と思われるが、部分的に 3 層と 5 層が一部混ざったような土層となっており、一部は攪乱をうけている可能性がある。なお、a 地点 3 層主体土層から成川式土器片が 1 点出土している。d 地点は地表面より 70cm 掘り下げたが、攪乱層であった。

e 地点は、地表下 50cm ほど攪乱を受けており、その下層に水田層と思われる 2 層が認められた。遺物等の出土はみられなかった。

2013-D 郡元団地 L-9・10 区（ICP 発光分光分析装置と GC/MS による排水分析システム設置作業工事）

調査地点 郡元団地 L-9・10 区

調査期間 2013 年 12 月 13 日

調査担当 鹿児島市教育委員会 井口俊二

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 中村直子

郡元キャンパスにて、廃液処理室の改修・設備装置設置にともない、排水用配管設置のための工事が行われることになった。掘削地点周辺の過去の発掘調査では、数枚の水田層の堆積が認められていたため、立会調査を行うことになった。掘削深度は a 地点が地表下 40cm、b 地点は地表下 55cm で、a 地点は表土範囲内であった。b 地点は、地表下 50 cm 以下に水田層かと思われる土層が認められた。以上の結果から、本地点の掘削については、配管埋設深度を 40cm に留めるようにして工事を行うことになった。

2013-E 郡元団地 P-7 区（第二講義棟改修工事）

調査地点 郡元団地 L-9・10 区

調査期間 2014 年 2 月 19 日

調査担当 鹿児島市教育委員会 井口俊二

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 寒川朋枝

郡元キャンパスにおいて教育学部第二講義棟改修工事に伴い、電気工事が計画された。掘削地点は電気線引き込みのため、地表下 150cm 掘削される計画であったため、周辺の発掘調査の様相から古墳時代該当層に影響が及ぶ可能性があり、立会調査を行うことになった。立会調査では、地表下 130cm を掘削したが攪乱層であり、さらに配管が下層より確認された。よって、本掘削地点では包含層なしと判断し立会調査は終了した。

2013-F 桜ヶ丘団地 M-9・10 区（敷地境界法面保護工事）

調査地点 桜ヶ丘団地 M-9・10 区

調査期間 2014 年 3 月 4 日

調査担当 鹿児島市教育委員会 井口俊二

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 寒川朋枝

桜ヶ丘キャンパス北西部グラウンド横の法面について、降雨時の土砂流出など市道通行車に対する安全確保等のため、法面保護工事が行われることになった。現状の法面を重機にて 50～100cm ほど削ぎ落とすように掘削を行う計画であったが、工事予定地の北側には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があったため、北側の 2 地点について立会調査を実施した。a 地点ではアカホヤ火山灰に類似する埋土がまばらに認められたが、明確な層はなしていなかった。掘削範囲内は攪乱されていたと思われる。また、b 地点も樹根が多く表土の範囲内の掘削にとどまった。

2013-G 郡元団地 Q-5, I-3 区

(学習交流プラザ他外灯増設電気設備工事)

調査地点 郡元団地 Q-5・I-3 区

調査期間 2014 年 3 月 11・19 日

調査担当 鹿児島市教育委員会 有川孝行・井口俊二

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 寒川朋枝・新里貴之

郡元キャンパス内において、外灯移設工事が計画された。教育学部 b 地点の既存外灯を撤去し、本地点には新設の外灯を設置し、b 地点の既存外灯を学習交流プラザ東側 a 地点に移設する工事である。教育学部 b 地点は周辺を 100 ～ 120cm ほど掘削したが、古い配管等が多く攪乱を受けている状況であった。既存の外灯撤去後に新設の外灯を設置する際は掘削を行わないとのことであったため、包含層が残っていないと判断して b 地点立会調査は終了した。a 地点については、南北に深さ 150cm の暗渠が走っており、その側の掘削であったため地表下 160cm の深さまで攪乱を受けていた。

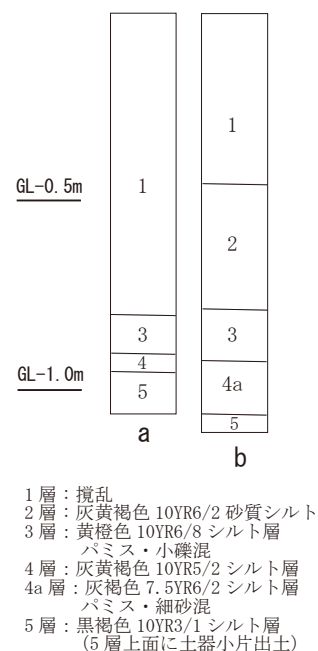
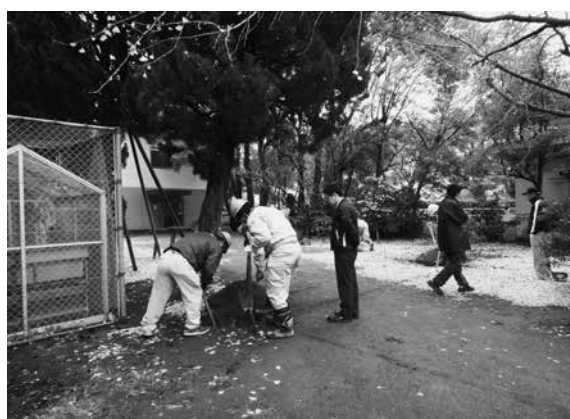


Fig. 17 2013-I 出土遺物



2013-D b 地点土層



2013-D c 地点掘削状況



2013-D b 地点土層



2013-F a 地点掘削状況

PL. 16 2013-D・F 調査

2013-I 郡元団地 K・L-5 区（大学構内ロードミラー設置工事）

調査地点 郡元団地 K・L-5 区

調査期間 2014 年 3 月 14 日

調査担当 鹿児島市教育委員会 長野陽介

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 寒川朋枝

郡元キャンパス法文学部内にて、ロードミラー設置工事が計画された。掘削範囲 100 × 100cm 弱であるが古墳時代の集落や水田跡が検出されているエリアが北西側に近接しているため、立会調査を行うこととなった。両地点とも地表下 110cm ほど掘削を行った。a 地点では地表下 45cm、b 地点では地表下 80cm ほど攪乱を受けていた。さらに地表下 100cm ほどのレベルで黒褐色土が認められ、その上面には土器小片（主に笹貫式土器か）が出土した。これは、本地点北東部で検出された古代の土器溜まり遺構の周辺部と思われる。

2013-J 桜ヶ丘団地 H-5・6 区（付属図書館桜ヶ丘分館西側植栽地移設工事）

調査地点 桜ヶ丘団地 H-5・6 区

調査期間 2014 年 3 月 18 日

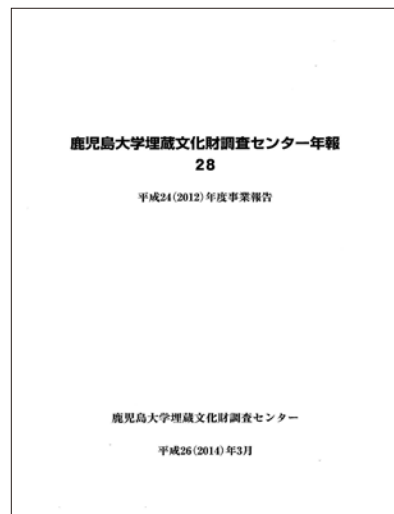
調査担当 鹿児島市教育委員会 井口俊二

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 新里貴之

桜ヶ丘キャンパスでは、図書館西側にプレハブを設置することになり、整地並びに植栽移植工事が計画された。a 地点樹木を b 地点へ移植する工事である。a 地点は掘削深度 120cm に及んだが、地表下 110cm までは攪乱されており、その下位は薩摩火山灰層が認められた。また、移植先は地表下 100cm 深度の掘削を行ったが攪乱を受けていた。

V 遺物整理

平成 26（2013）年度の報告書第 9 集掲載予定の Q・R-8・9 区付属中学校増築・改修工事（2009-1）と R～T-7～9 区付属中学校グラウンド改修工事その他（2011-1）の遺物、同年刊行の年報 28 掲載の Q-10 区付属中学校プレハブ設置に伴う工事に伴う発掘調査（2012-2）の出土遺物、年報 28 掲載の平成 24（2012）年度試掘・立会調査遺物の洗浄・注記・実測・トレースを行った。そして、平成 25 年度に引き続き、昭和 51（1976）年度理学部 2 号館増築予定地（釘田第 8 地点）発掘調査（1976-1）出土土器の注記・実測、同地点出土木製品の実測を行った。



PL. 17 平成 25（2013）年度刊行物

VI 刊行物

平成 21 年度 Q・R-8・9 区付属中学校増築・改修工事（2009-1）と平成 23 年 R～T-7～9 区付属中学校グランド改修工事その他（2011-1）を掲載した「鹿児島大学埋蔵文化財調査センター第 9 集 鹿児島大学構内遺跡（郡元団地）」、平成 24 年度桜ヶ丘団地 B-4～6 区（2012-3）を掲載した「鹿児島大学埋蔵文化財調査センター第 10 集 脇田亀ヶ原遺跡 桜ヶ丘団地 B-4～6 区（桜ヶ丘ビュータウン造成工事）」の発掘調査報告書を刊行した。また、平成 23（2012）年度の発掘調査概要報告（2012-1・2）、立会調査報告（2012-A～J）、その他事業について掲載した「鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報 28」を刊行した。

VII 遺物保管

大学構内出土遺物は保存管理・活用も考慮すると一括収納が望ましいが、スペース確保の問題もあり現在は各部局にて収蔵している。これらの遺物については、例年遺物収蔵状況の確認を行っており、平成 25 年度は学内 16ヶ所の遺物保管場所について、湿度・気温等一定環境の収蔵状況が保たれていることを確認した。保管場所の移動作業としては、教育学部出土遺物が 2 号館 4 階に保管されていたものを、事務棟屋上の倉庫に移動することとなった。また、廃液処理室に機械設備が設置されることになり、廃液処理室に収蔵していた釘田第 1 地点の土器を中心とする未報告資料を文系総合研究棟へ、釘田第 8 地点出土木製品類は食堂裏のプレハブに仮移動させ、プレハブ内で木製品の実測作業を行うこととなった。

また、整理作業部屋として借り受けていた農学部共同利用棟 1 階の部屋が改修されるとのことで、同棟 3 階別部屋へ移転することになった。

VIII 普及啓発活動その他

鹿児島大学構内遺跡資料に関して、遺物借用申請が 2 件、遺物見学依頼が 2 件あった。

附属中学校より授業で生徒に実物資料を見学させたいとの旨で遺物借用希望があり、附属中学校敷地内より出土した遺物を中心に大学構内遺跡より出土した遺物の貸出を行った。また、鹿児島国際大学博物館実習施設主催特別展示「平成 25 年度考古学ミュージアム特別企画展 調理具としての土器の視点（平成 25 年 5 月 31 日～6 月 20 日）」へ展示する目的での遺物貸出を行った。

遺物見学は、小学生 2 名が夏休み自由研究として桜ヶ丘団地の遺跡について調べたいとの連絡があり、遺物見学と解説を行った。また、鹿児島県立埋蔵文化財センター職員から、農学部出土陶磁器類の資料見学の申請があった。

ワークショップとしては、2014 年 3 月 21 日に土器焼成実験を行った。参加者は学生・一般市民を含め約 40 名の参加者があり、発掘調査の際に桜ヶ丘構内遺跡より採取した粘質土も用いて土器を整形し、野焼き実験を行った。

また、釘田第 8 地点の旧河川内より出土した木杭類などの木製品の樹種を同定するため、森林総合研究所の能城修一先生に来て頂き、プレパレート作成作業を行った。その結果については、『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報 28（2014）』に掲載している。



ワークショップ（土器焼成実験）風景



樹種同定サンプリング作業風景

PL. 18 ワークショップ，樹種同定サンプリング作業

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会規則

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人鹿児島大学常置委員会規則（平成16年4月1日制定）第3条第3項に基づき、国立大学法人鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という）に関し、必要な事項を定める。

(組織)

第2条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長（以下「センター長」という）。
- (2) 各学部、大学院理工学研究科及び大学院医歯学総合研究科の教授、准教授又は講師のうちから選出された者 各1名
- 2 前項第2号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第3条 委員会は、次に掲げる事項について審議する。

- (1) 調査実施計画に関すること。
- (2) 埋蔵文化財調査センターの予算に関すること。
- (3) その他埋蔵文化財の業務に関すること。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、第2条第1項第1号をもって充てる。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第5条 委員長は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聞くことができる。

(事務)

第7条 委員会に関する事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

- 1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

- 1 この規則は、平成18年4月1日から施行する。

附 則

- 1 この規則は、平成19年4月1日から施行する。
- 2 この規則の施行前に委員となった助教授は、その任期の満了の日まで引き続き委員とする。

附 則

- 1 この規則は、平成19年11月28日から施行し、平成19年4月1日から適用する。

附 則

- 1 この規則は、平成20年1月1日から施行する。

附 則

- 1 この規則は、平成21年4月1日から施行する。

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター規則

(趣旨)

第1条 この規則は、鹿児島大学学則（平成16年4月1日制定）第7条第2項の規定に基づき、鹿児島大学埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という）に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 センターは、鹿児島大学（以下「本学」という）の埋蔵文化財の調査に関する業務を行い、本学内に存在する埋蔵文化財の保護を講ずることを目的とする。

(業務)

第3条 センターは、次の業務を行う。

- (1) 調査実施計画の立案
- (2) 発掘調査、分布調査および確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) その他必要な事項

(職員)

第4条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長（以下、「センター長」という）
- (2) 主任
- (3) その他必要な職員

第5条 センター長は、本学の考古学に関連する教員のうちから国立大学法人鹿児島大学学内共同研究施設等人事委員会（以下「委員会」という）の意見を参考にして、学長が選考する。

- 2 センター長は、センターの業務を掌理する。
- 3 センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。
- 4 センター長に欠員を生じた場合の補欠のセンター長の任期は、前任者の残任期間とする。

(主任等)

第6条 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を委員会が推薦し、学長が選考する。

- 2 主任は、センター長の命を受けてセンターの業務を処理する。
- 3 職員は、センターの業務に従事する。

(事務)

第7条 センターに関する事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この規則に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、別に定める。

附則1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

- 2 この規則施行後、最初のセンター長は学長が指名した者をこの規則により選考したものとみなす。

附 則

- 1 この規則は、平成22年1月29日から施行する。

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会（平成 25 年 4 月 1 日現在）

委員長 新田栄治（埋蔵文化財調査センター センター長）

委 員 本田道輝（法文学部）

日隈正守（教育学部）

井村隆介（理学部・理工学研究科）

吉留厚子（医学部）

嶺崎良人（歯学部）

木方十根（工学部）

橋本文雄（農学部）

松元光春（共同獣医学部）

鳥居亨司（水産学部）

小片 守（大学院医歯学総合研究科）

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター（平成 25 年 4 月 1 日現在）

センター長（併）法文学部教授 新田栄治

主任 准教授 中村直子

助教 新里貴之

特任助教 寒川朋枝

技術補佐員 赤尾和洋

濱田綾子

東 友子

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報 29

2015 年 3 月発行

編集・発行 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

鹿児島市郡元一丁目 21-24

TEL 099-285-7270

印刷 斯文堂株式会社

鹿児島南栄 2-12-6

TEL 099-268-8211

Kagoshima University

Research Center for Archaeology

Report Vol.29

CONTENTS

Capter

1	Report of archaeological reserch in fiscal year 2013	1
2	Report of excavation at Area I-9 in Korimoto Champus	5
	Report of excavation at Area I•J-4•5 in Korimoto Champus.....	8
3	Report of test excavation at Area F-6 in Korimoto Champus.....	14
4	Report of rescue surveys 2013	19
5 ~ 8	Report of other jobs	36

Published by
Kagoshima University Research Center for Archaeology
2015